東洋学文献センター運営委員会委員

（昭和43年2月現在）

東研	教授	小口偉一	総図書館長	伊藤四十二
〃	教授	橋本秀一	法教授	丸山真男
〃	教授	窪徳忠	文教授	藤堂明保
〃	教授	泉靖一	農教授	篠原泰三
〃	教授	荒松雄	経教授	川田侃
〃	教授	鈴木敬	教養教授	上原淳道
〃	助教授	佐伯有一	社研教授	古島和雄
〃	助教授	山崎利男		
〃	助教授	大野盛雄		
〃	助教授	尾上兼英		

東洋学文献センター職員

センター長	教授（併任）	川野重任
センター主任	教授（併任）	小口偉一
	助教授（併任）	佐伯有一
	〃（併任）	尾上兼英
	講師	初見昇
	助手	陳明新
	〃	沢谷昭次
	事務官	畦浦美矢子
	〃	寺阪百合枝
	事務補佐員	柿原弥生
	〃	賀谷サトミ
	〃	志知和子
	〃	渋谷郁子
	〃	平館洋子
	〃	山村牧子

編集後記

漢籍目録法の研修を受けるべく，スタッフが顔をあわせたのは昨年の2月初め，研究所がまだ大塚にある外務省研修所と同居中の時であった。その後1年の間に，センターは所を変えること4回，今は改装のため8階に仮住まいをしている。研究所自体，今日まで固有の建物を持たず，流転の運命を辿ったということであるが，文献センターの運命もまた，それに似ているのであろうか。ともあれ，当面の主目標である漢籍目録の完成を目指して進んできた。

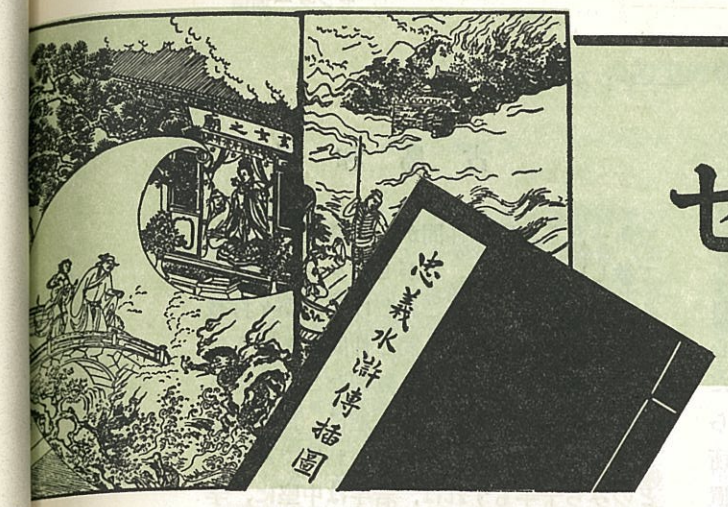
各スタッフがいくつかの仕事を抱えている中では，「センター通信」を出すことも容易ではないが，とにかく第1号を発行するはこびとなった。本来われわれは，「センター通信」を親しみ易いものにする方針であつたが，今回はセンターの紹介を中心にしたので，こと志と違った感が深い。第2号以下，面目を一新せねばならぬと思っている。

（N. H.）

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報“センター通信”No. 1　1968年3月19日
発行責任者　宮本　健　　東京都文京区本郷7丁目3ノ1　電 代表（812）2111（内線）7831

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

Documentation Center for Acian Studies.
Institute for Oriental Culture
The University of Tokyo.



センター通信

No. 2　1968.10

主任就任にあたって

窪　徳　忠

慮らずも本年四月からセンター主任という重責を負うことになったので，ここに私の考えをごく簡単にのべさせて頂きたい。

近年とみにその数量をましつつある文献資料の中から，ある研究者が必要資料を的確に選びだすのは，容易なことではない。そのために，まず自然科学・技術方面からその情勢に対処すべく，ドキュメンテーション・サービスが要請された。そこで，ドキュメンタリストは，研究者の利用に資するために，文献・写真その他の諸資料の体系的整理に着手したが，とくに人文・社会科学方面においては，日も浅い上に実績も少なく，かつ「ドキュメンテーション」の概念規定さえさだかでない現状である。今後この点の十分な解明とそれに即した作業の遂行が望まれるが，東洋文庫内東洋学文献センター連絡協議会刊の日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録や漢籍叢書所在目録などは，その実績のひとつといえるであろう。とくに，京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター刊の東洋学文献類目は高く評価されよう。本センターが，遅ればせながら目下鋭意作製中である本研究所所蔵の漢籍目録をも，その一環と考えて頂ければ幸いである。

ところで，漢籍目録作製後の作業は，本センターの将来像とからんで，設立当初からのいわば宿題であった。三年間の準備期間終了と共に，設備費即ち図書蒐集費が打切られて，爾後の活動に大きな支障を来たす由の明らかになった昨年度，目録作製の進捗状況を考慮しつつ，センター叢刊の刊行が企画され，関係者の努力によって第二輯まで発行された。本年度は，それをうけてさらに検討を加え，一層充実した第三輯以下の続刊を当面の目標とすると共に，本センターの将来像形成のために，とくに名を同じくする京都大学人文科学研究所の東洋学文献センターと緊密な連絡をとりつつ，次年度以降の本センター独自の作業計画の方針を定め，もって設立当初以来の宿題の一端に応えようと考えている。

センターは，元来利用者のものである。利用者から遊離したセンターはありえない。その意味で，広く内外の利用者各位から本センターの方針やあり方につき忌憚ない御意見を頂けるよう，切望してやまない。

（東洋学文献センター主任）

私の希望

——センターの在り方について

古島和雄

大学という機関はもともと甚だ閉鎖的な存在である。その閉鎖性から生れてくるらしい派閥主義を破ることが，人文・社会科学の振興という問題を考えるばあい，中心的なかなめであると思われてならない。だから私は，センター通信の第1号に載せられた，文献センター設立の動きが，研究所の附属施設という形で，既設の大学に附置されたという具体化の仕方に，甚だ懐疑的であった。恐らく，このことは，研究所協議会という狭い枠の中に，人文・社会科学の振興という大きな問題を押しこめた結果なのであろう。閉鎖的な大学の内部にセンターを附設しておいて，たかだか文献資料の公開利用を義務づけてみても，期待しうるものは，そう大きくはないと思われる。ここには，既設の蔵書と設備を利用するといった，安上りなやり方と，このやり方を選ぶ思想の問題があるのだろうけれど，こういうやり方は，学問研究の発展からみると，かえって高くつくように思われてならない。大学の枠の外に，しかも，学問研究に基礎をおいた資料センターを，全く新しい型として創っていくという，大きなかけをやってみて欲しかったと考えているのである。だから，現に動きはじめた東洋学文献センターに要望することは，これが初発のセンター構想とは全く別のものだとわり切って，利用者にたいする変なサービスなどということは，余り考えて欲しくないのである。

どのみち貧乏な，われわれ日本の研究者は，デパートまがいの快適なサービスなど大学という機関の中で望めるとは，もともと期待していない。ただ，こうあって欲しいと思うのは，同じ学問研究を志ざしている仲間がやって来たと，利用者を考えて頂きたいのである。若い研究者，とくに学生であったら，同じ仲間が一人増えたと考えて欲しいのである。私がセンターに期待するサービスは，ただこれだけだ。少々打算的にあとを続けると，同じ仲間だということになれば，少しばかり無理なこともやって貰えるだろうし，また，逆に，無理なことはやって貰えなくてもいいわけである。どのみち十年もすれば，若手は中堅に，学生は第一線の研究者になるのだから，文献センターの側としても，今少し無理してでも，同じ仲間だとしておけば，その酬いは直ぐにはね返ってこようというものである。それは，センターが本当の意味でのセンターとして機能することでもあろうか。

研究者というものは，甚だ自己中心的にしか物を考えない種族に属するもののようである。そうした点から，文献センターの資料収集やドキュメンテーションなどに，若干の希望がないわけではないが，これらを含めて，東洋学文献センターの対象範囲についてだけは，一言希望しておきたい。センター設立のいきさつからして，差当って，その重点を古典研究，歴史的研究の分野において出発することは結構だと思うけれども，東洋文化研究所のもつ力量と，その特徴とする在り方からして，余り長くその段階に留まって欲しくない。成るべく近い将来計画として，現代のアジアの問題に，真正面から取組めるだけの広さを是非もって頂きたいのである。センターの英文表記から察するところ，当然そのような含みをもっているものと思うわけだが，現代アジア研究の日本における現状からして，とくにこの点は，強く要望したいのである。

（東大社研教授・東研東洋学文献センター運営委員会委員）

センターの初歩的構想について

<はじめに>

昭和36年5月17日の「人文・社会科学の振興について」という学術会議の勧告（センター通信No1. 3頁<参考資料>参照）にそって，国立大学研究所協議会が昭和37年10月27日付で出した「中間答申」（センター通信No1. 3頁<参考資料>参照）が示した「人文社会科学専門文献センター」のセンター像は，つきつめていうと，「文献資料の一般公開を原則とし，施設，設備の近代化を図るとともに文献資料の閲覧，ならびに必要に応じて複写サービスなどを行う全国共同利用の専門文献センターの形式によって実施されることが適当」（センター通信No1. 4頁. I. 人文社会科学専門文献センターの設置について—所引）というにある。

しかし，実際に専門文献センターが財政措置を伴って具体的に設置されてみると，いずれのセンターの場合にも，3年間で，文献資料の蒐集，近代化のための諸設備，必要定員の充実などの準備を行い，4年目から本来の使命を実行しはじめるという段取りのレールがしかれたにすぎなかった。

一方，実際にセンターの業務に従事しているわれわれは，センター通信No1. 6頁に掲げた漢籍目録の作成予定が，後にのべるように第3年目の昭和43年度末までに，予想したよりも早いテンポで進みつつある現在，この作業を通じて，あるいは，東洋学文献センター叢刊やセンター通信の発行などを通じて，昭和44年度以降センターが，どのような長期的方向とプランをもち，どのような体制ですすんでゆくかについて，あらためてセンターの将来の見通しを具体的に考え，実行できる内容を十分に検討しなければならない段階にたっていると考えている。

そこで，非常に抽象的な勧告の文言から出発したわれわれセンター関係者が，とりあえずの三年間の作業の中で，与えられたさまざまの条件の中で，ここまでならできると考えた点を披歴して，研究者各位の忌憚のないご意見を寄せられるときの参考にしていただきたいと思う。

この場合，三年間あるいは，それ以前からの準備段階をふりかえり，その上で初歩的なセンターの将来構想を示すという順序で整理するのが便宜のように思えるので，ここではそのような順序に従って報告してみよう。

<準備段階>

まず，はじめに，東研にセンターが附属施設として設置され，漢籍目録作成の作業がはじまるまでをふり返ってみたい。その理由は，この期間に所内外の人々のセンターに対する具体的イメージが実にさまざまな形でだされたが故に，センター関係者としては，将来への踏台として非常に参考になったからであり，また，利用者各位が，今後のセンターのあり方を考えて下さるのにも役立つと考えたからである。

数年前に終了した「アジア・アフリカ地域総合研究」は，とにもかくにもある程度の範囲の大学・研究機関の文献資料蒐集に寄与したが，東研においては，中国・朝鮮文関係図書については，留置財源というきわめて不安定な購入費に依存していた。このため，昭和36年の勧告時に，もっと安定した財源と図書職員の定員増について，文部省の図書館情報室(現在の情報図書館課)に話を持ちかけていたが，実効をみないで時がすぎた。

ところが，昭和36年の国立大学協議会のセンターについての中間答申が発表されるや，東洋文庫・人文研・東研の三機関は，文部

省側とともに連絡会議をひらき，「東洋学専門文献センター」のあり方について話し合った。そこでは，まず，各センターの文献資料蒐集についての統一した範囲の画定と，各センターが重複して購入しないための各々の分担範囲を決めることが議題の中心となり，統一した範囲は，中国・朝鮮の地域と中国文（古典現代を含む）朝鮮文の文献資料に限ることとした。またその内訳として，東洋文庫は，族譜・地方志・チベット・満洲関係（中国関係に限る），人文研は明代文集のマイクロ蒐集，東研は，中国の政治・法律（いわゆる大木文庫を強化する），戯曲・小説（いわゆる双紅堂文庫を強化する）関係の古典（いわゆる旧学），および戦後中国（いわゆる新学）・朝鮮の人文社会科学関係の刊行物（いわゆる下中文庫の強化）というふうに，各機関の特色ある蒐集分担範囲が決められた。また，東洋学（この話合いでの共通した思想では，中国・朝鮮）の文献についての専門職員の養成が，定員要求とからめて議題となった。また，公開利用のための参考事務として，東洋文庫が中心となって，いくつかのセットのカードシステムを整備し，他の二機関は，これについて補助的業務を行うことなどが話合われ，これにしたがって文書がつくられ，文部省は，三機関に対する設備費と定員を大蔵省に要求した。

この当時の三機関および，中間答申における「東洋学専門文献センター」のもっていたイメージは，歴史的にいって，すでに群をぬいて中国朝鮮文関係の資料蓄積の多い三機関の資料を強化し，反面これを全国の研究者が利用し易いような体制づくりをするということが第一点，第二に，東洋文庫は，従来すでに図書館的なサービス業務に習熟しており，その実績もあること，反面他の二機関は研究機関でもあることなどからして，東洋文庫を中心として，他の二機関は補助業務を行うというトロイカ方式が考えられていた。

ついでながら，学術会議の文献センターの「将来計画に関する中間報告Ⅲ」日本学術会議長期計画調査委員会昭和40年4月発表（「日本学術会議月報」Vol. 6 No. 7 pp22～27）の第3章「学術研究の共通基盤の拡充」第2節「大学図書館の近代化と学術情報組織の確立」の第1項の学術情報組織に関する計画にのべられた〝全国的規模にわたる壮大なセンター計画〟は，これまで述べてきた国立大学協会の中間答申のセンター計画とは異なった発想と手続きで出されたものであり，われわれのセンターは，現在においては，壮大な中間報告とは一応別個の性格を附与されていることを事実経過として付言しておきたい。この点，当時および現在の時点に至るまで東研のセンター関係者の一部，および一般研究者の間にも事実認識の点で若干誤解された点があったことを指摘しておきたい。この点は，とくに東研のセンター関係者が，センター像を考える場合，当初一種の混乱を惹き起したことは否めない。

さて，学術会議の勧告があれば，それで直ちに予算措置が実現するという仕組にはなっていないので，予算措置がなされる前に，三機関のチームワークによって具体的に作業を行い，実績をつみ上げ，既成事実をつくっておこうというので，昭和38年に三機関所蔵の日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録，昭和39年には，三機関所蔵の中国地方志連合目録，昭和39年に，三機関所蔵の漢籍叢書所在目録を，東洋文庫が中心になってつくり，各研究機関に送附した。

しかし，この三機関の連絡会議で打ち出されたセンターイメージの実現は，東洋文庫が，民間団体なるが故に，「東洋学専門文献センター」の形での予算措置が不可能であるという事態がおこったことによって，デッドロックに乗り上げた。三者連絡協議会では，この事態に直面して，東洋文庫については将来別途に，センターとしての運営ができるような予算措置の方法を考

えることとし，その前提で，まず人文研に足場をつくるということで，人文研に，昭和40年度からセンターが設置され活動を開始した。

人文研は，3年間の準備期間中に，明代文集のマイクロ蒐集を精力的に行い，閲覧複写サービスを行うほか「東洋学文献類目」を，従来よりもスピードアップして毎年刊行することをもって，ドキュメンテーション活動とした。

東研では，昭和41年度センター設置の見通しがたったころから，センター設置について本格的な取組みが開始された。

センター設立準備委員会では，昭和41年4月14日（教授会は，前年度末には受入れることを決定していた）の教授会に「東洋学文献センター実施について」という計画案文書を提出した。この時のセンター設立準備委員会のセンターについてのイメージは，次の五点に要約される。

① 文献資料の公開利用を目的とし，その対象はアジア研究者に限る。

② したがって，中国朝鮮にかぎらず，広く他のアジア地域の文献の公開利用を行う。

③ ドキュメンテーションは，研究所各部門あるいは，研究班の協力によって全所的に展開し，センタースタッフは，その実務を担当する。

④ 但し，当面第一期の事業は，研究所蔵書目録の作成とそのカードの整備。

⑤ 図書業務との関連を合理的にする。

これは，教授会で，「東洋学」という概念を中国に限らず，アジアとすべきだという意見が早くから出されていたのに即したものであった。しかし，とくに第三点について強い異論もあり，議論は熟さなかった。

ついで，同年5月10日には，附属施設についての法的根拠とともに，「東洋学文献センター運営のために」という文書がセンター委員会から教授会に提出された。

これは，教授会や，図書委員会での報告討論を考慮に入れてつくられた運営上の方針に関するものであった。

そこでの思想上の骨子は，研究所の自主性を主体とし，附属施設なるが故に，研究体制事務行政図書業務と関連せざるを得ないことから，全所的に民主的運営をなすべきこと，公開利用については，公開と保存研究所内利用と所外利用との矛盾に注目し，漸進的に仕事をすすめることなどであり，運営組織上の原案が提示されていた。

やがて，5月から6月にかけて，拡大所内会（事務職員も含めて）が開催された。

そこでは，とかく従来，東研に対して批判のあった非公開的傾向を一挙に打破することになり，研究者にとって（所の内外を問わず）非常な利益になるという賛成論に対して，こうした大きな問題が，はじめから全所的な規模で公開討議されなかった非民主性に対する批判，限られた大学の独占をおしすすめる結果にならないか，文献資料は，東研としては，本来の図書費増額要求で行うべきものであり，また，実際問題として，行政事務と図書業務に関連をもつが故に，それらの職場の労働強化となる。とくに，図書業務は，センターの業務と類似の点が多く被害が大きい。また，教官職と事務職の定員がつくが，その身分上業務上の位置は微妙であり，矛盾を拡大させるものである。全国共同利用の実を上げるだけの方向を保証できないのではないか。つまり，たとえば複写一つとっても，その費用が研究者に保証されない限り，もっとも豊かな財源をもつところしか利益をうけない（たとえばアメリカなど）などの批判的意見がのべられた。

この議論の過程で，6月16日，教授会は「東洋学文献センターに関する覚書」を諒解事項として決定した。その主なものは次の通りである。

① 文献センターは，研究所の本務に支障を与えないようにする。

② 第一期三年計画完了後の拡大は当面考えない。

③ 組織上および運営上，研究所図書室と文献センターとは，明確に区別することを本旨とする。

この教授会決定をめぐってもまた，7月上旬まで，所内会等で議論が闘わされたが，結局，原則的反対論も，こんごの運営の中で，その立場から発言してゆくということで，教授会決定にしたがって，センター設立作業がすすめられた。

この間，7月21日に，東洋学文献センター問題連絡会議（連絡先東京都立大学人文学部歴史研究室）と，東研センター委員会との会見が行われ，その後，連絡会議の名で訴えがだされた。

その骨子は，こうである。第一に，東洋文庫・東研・人文研が東洋研究の中心であるということを自明の前提としていることは，かつて，東洋の研究を見誤るばかりでなく，アジア諸国の解放に背反した日本の東洋研究の頂点にたっていた東大京大中心の研究体制を引きついだ思想にたつものであり，全国の大学に格差を設けようとする一連の最近の政策に沿うものである。第二に，文献センターの問題は，研究の一定の組織化を本来伴うものであり，したがって，人文研と東研についたということは，大学の自治の問題に規制され，また，東研が「研究所の研究体制を妨げない」ことを原則としている以上，本来あるべき共同利用設備（真に解放された）としての機能は結局果し得ない。したがって，本来あるべき全国共同利用の文献センターの設立という理想の実現に対して，悪い既成事実をつくった。本来，文献センターは，大学をこえたより広い民主的な場での問題であるはずだ（この主旨は，「訴え」よりも『歴史評論193号昭和41年9月号』にのせられた会見記事の後文の所見の方が問題をするどくついているので主としてそれによった）。

こうした状況のなかで，センター委員会は，当初の計画として，東研およびセンター所蔵の文献資料の中，中国の旧学目録を，内閣文庫所蔵目録方式で，昭和41～43の3年間で作成する。また第二期として，昭和44～45年の2年間に，東研および附属センター所蔵の中国の新学目録を作成する。そして第三期は，朝鮮関係文献目録をつくる。さらに一年単位で，中国の旧学と新学書，朝鮮本の新収目録をつくるというプランをつくった。

しかし，このプランは，種々検討された結果，パンチカードシステムを導入し，日々雇傭7名を採用し，運営費の大部分を人件費に投入して，昭和42年2月から作業にかかり，2年間で，目録カードの全部を仕上げるという急テンポの作業計画に切りかえ，目録作成方式も，人文研方式に準ずることとなった。

昭和42年4月には，講師・助手2名事務官1名の人員も決まり，漢籍目録作成のための講習を行い，作業は順調にすすんだ。そして，作業の進渉状況からして，昭和43年度に入るころ，43年度の9月には旧学のカード化を終え，44年3月までの間に新学部門のカード化，つまり，当初44～45年の二年間の第二期計画としていたものも，仕上げることができる見通しさえたって来たのが現状である。ちなみに冊子目録の刊行は，昭和44年度にその為の概算要求を行い，45年度中には刊行したいと考えている。また，センター通信No.1，センター叢刊第一輯および第二輯（センター通信No.1．7頁参照）もすでに発行され，第三輯清代地方劇資料(2)も本年11月には刊行される予定になっている。

さて，以上の経過の中で，そして，実際に作業を遂行しつつ考えられた総括的な感想をのべると，大体次のようなことがいえるかと思う。

一つは，がむしゃらに目録づくりに専念して来て，かなり順調な成果をあげてきたとはいうものの，この目録づくりは，やはり図書業務の一環でしかないということである。もちろん，冊子目録の作製は，センターに期待される機能を発揮するための最も基礎的な作業であることに間違いはない。そして極めて不十分ながら，少なくとも東研およびセンター所蔵文献の公開利用の第一段階となることも確かである。しかし，このレベルでの仕事は，明かに，本来の図書室の仕事と競合もしくはそれを代行したものであるという結果になる。

* センター通信No1 6頁第2項　漢籍目録の作成の注で，「当研究所には在来，漢籍目録およびカードができておらず，」という表現がみえるが，この表現は不的確，もしくはあやまりであって，漢籍冊子目録が，大木文庫，双紅堂文庫を除いては出来ておらず，カード目録は存在する。訂正し，謹しんで研究者各位ならびに東研図書室の方々にお詫びする。但し，カード目録は，内容的に必ずしも十分なものとはいえない。

そして，みなさんにおつたえしておかなければならないのは，設備費つまり，文献資料の購入費が43年度限りで一応打切りになることは，先発の各センターの経験からいって極めてはっきりした事実となっていることである。

こうなってくると，図書館業務の一環としてのセンター機能を中心とする道は，環境条件財政条件からいってもゆきづまらざるをえないといってよいであろう。また，研究体制から発想された「東洋学文献センター問題連絡会議」が提起した本来の文献センターの道は，体制的にも財政的にも極めて困難な問題をはらんでいるといわざるを得ない。

こうした状況の下で考えてみると，たとえば東研に対してつけられたセンターが，文献資料の公開利用サービスを行うものという，国立大学協議会の勧告は現状では十分には実行し得ないものであるといわざるを得ない。同時に，文部省の情報図書館課が一般的にもっている学術情報センター理念もまた実現が難しいといわざるを得ない。それは，別個の場で，より広い視野でそれこそ全研究者の討論の上にたって考えられねばならない問題性をもっている。われわれは，この附属施設がどんな次元で研究者の役に立ち得る仕事をなしうるのかという方向で，われわれのセンター構想を考えてゆかざるを得ない立場におかれたと感ずる。

＜将来のセンター構想＞

センター関係者は，この問題をめぐって，とくに，昭和43年度に入り，目録づくりの見通しが立ったころから，何回となく討議をくり返して来た。その結果可能な限り，本所とそのセンター所蔵の資料について複写等の利用体制を継続することは勿論であるが，東研のセンターは，まず，すでに芽生えているセンター叢刊の中でも，とくに，各研究者が，ドキュメンテーション活動として，それも，極めて専門的な課題について，資料的な成果を蓄積していながら，発表形式・費用その他の難点のために公刊されない，あるいは公刊することができないで眠っているものを，堀りおこし，広く全研究者の役に立つような仲介役をすることに力を入れ，また，そのようなプロジェクトの進行を容易にするように側面援助をすることが第一に浮かび上った。この場合側面援助とは，たとえば，語彙集のような類の場合，まずカードを作成しなければならないが，これに必要なパンチその他の形式のカード様式の検討・作成をセンターと研究者でともに行ない，これを研究者に提供し，その研究者のプロジェクトの完成を援助し，その成果の公刊まで責任をもつのである。これは，当然不定期刊となるが，東研および東大以外のいかなる研究者にも適用されるものである。

次に，センタースタッフがそれぞれ各人独自のプロジェクトをもち，作業を行い公

刊する計画が考えられている。この場合，スタッフは，可能な限り，研究所の資料文献を中核とするかなり専門的なプロジェクトをたてる。したがって，スタッフは，当然に，研究所もしくは，研究所外の専門研究者と密接に結びついて，しかも，それぞれ専門に習熟することが要請される。そして，でき上ったものは，研究者の専門研究にかなり幅広く裨益し得るようなものでなくてはならない。

そこで当面具体的には，次のようなプランを考えている。

Ⅰ　センター叢刊

既刊　41年度新収図書目録（第一輯）

〃　清代地方劇資料(1)（第二輯）

1　清代地方劇資料(2)

2　周揚論文・周揚批判論文目録

3　明刊西廂記見在目録

4　魯迅全集注訳索引

5　和刻本唐人別集目録

6　李大釗著作・研究論文目録（付初期論文選集未収分）

7　日本における明治以降の朝鮮研究著作・論文目録

8　郁達夫著作・参考文献目録（付年譜）

9　仁井田文庫目録

10　漢籍目録作成経過報告

11　42・43年度新収図書目録

12　蕭紅年譜

13　老舎年譜

14　西廂記校勘表

Ⅱ　センタースタッフ作業計画

1　明清政治・法律文献所在目録

2　唐代著作総目録

3　東洋文化研究所及び東洋学文献センター所蔵古文書目録・釈文

4　全唐詩索引

5　19C～20C史籍解題

6　時報記事索引（1908～37）

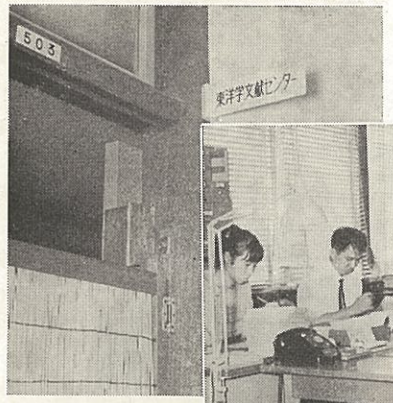
以上が，われわれの今後のセンターに期待されるべき，また単なる図書館業務とも異る構想の方向性についての初歩的な考えであり，三年間の作業に密着しつつ到達した当面の見解である。

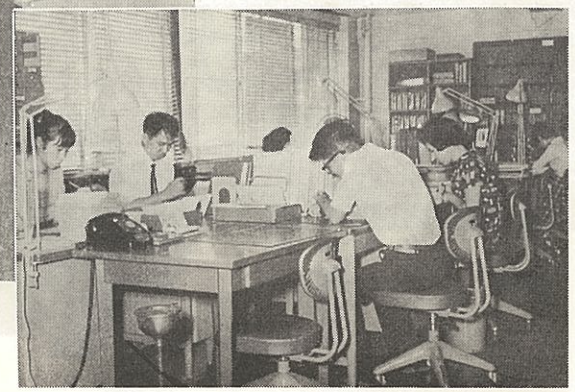
研究者各位は，われわれが到達した見解について，ご批判ご意見を下さるよう望んでやまない。

お　願　い

この号をお読みの際は，センター通信No.1. 1968年3月創刊号に掲載しました（参考資料）を参照していただければ幸いです。この号には，とくにわたしたちセンター関係者の初歩的な構想をのせましたので，どしどしご意見をなるべく1400字以内におまとめ下さってお寄せ下さるように心待ちにしております。なお，センター通信創刊号・センター叢刊第一・二輯とも残部が少々ございますのでご希望の方に寄贈いたします。

連絡先　東京都文京区本郷7～3～1
東京大学東洋文化研究所附属
東洋学文献センター
電話（812）2111　内線7831





（左）センター入口

（下）作業室風景

東洋学文献センター作業室紹介

赤門をくぐり，経済学部の裏手を行くと，総長公邸として使われている旧前田家懐徳館の筋向いに東洋文化研究所の建物がある。五階でエレベーターを降りると，すぐ右手が東洋学文献センター作業室である。一歩部屋にふみこむと，およそ漢文とは縁のなさそうな娘さんたちが五，六人，机の上に帙入りの漢籍を山と積んで，何やら調べ物をしているのが目にはいる。彼女たちは，研究所所蔵の漢籍のカードをとっているのだ。

作業室の目下の仕事は，研究所書庫から本を運んできて，こうして目録作成の基礎となるカードをせっせと作ること。一口にカードとりといっても，漢籍の場合，書名，著者，出版などそれぞれについて必要記入事項がはっきりしないものも多く，なかなかに骨が折れる。その上，一日中単調なカード書きだから，若い彼女たちにはかなりの苦痛でもある。それでも，作業開始以来一年半ばかりたった現在，経，史，子，集の四部はもう終って，カードはいま最後の叢書にかかっている。十月末までにカード作りは一応完成の予定だ。まさに，彼女たちのねばり強い努力のたまものといえよう。

こうして出来上がったカードは，疑問の残ったまま作業室で処理出来なかった本といっしょに，助手室にまわる。助手室では，カードのチェックと分類・排列の作業が進められていく。

九月のある午後，どんより曇った東京の空にポッカリ飛行船が浮かんだ。単調なカード作りから手を離し，作業室では皆が窓に身を寄せて，のんびりと旋回する飛行船に見入った。「あれは二十人は乗れます」とかなりでたらめな解説をする者，「もっと近づかないかしら」と身を乗り出す者。中でもとりわけ興奮した様子の一人は，「あたしは絶対あれに乗るわ」と力むことしきり。やがて，飛行船はビルのかげにかくれ，また出るかと待ったがそのまま消えてしまった。

そういえば，目録作成にとりかかった時には七人もいた事務補佐員もいまでは四人。この四人も，目録完成とともにセンターを去ることになっている。来年三月には，しきりに飛行船に乗りたがった人は世界旅行に出発するはずだし，そのほかの人たちもそれぞれ新しい職場に散っていくことだろう。

東洋学文献センター運営委員会委員

（昭和43年9月現在）

東研教授	川野重任（新）	総図書館長	伊藤四十二
〃 教授	橋本秀一	法教授	丸山真男
〃 教授	窪徳忠	文教授	前野直彬（新）
〃 教授	泉靖一	農教授	篠原泰三
〃 教授	荒松雄	経教授	川田侃
〃 教授	鈴木敬	教養教授	上原淳道
〃 教授	佐伯有一	社研教授	古島和雄
〃 教授	大野盛雄		
〃 助教授	山崎利男		
〃 助教授	尾上兼英		

東洋学文献センター職員

センター長	教授（併任）	小口偉一（新）
センター主任	教授（併任）	窪徳忠（新）
	教授（併任）	佐伯有一
	助教授（併任）	尾上兼英
	講師	初見昇
	助手	陳明新
	〃	沢谷昭次
	事務官（併任）	植谷忠雄
	〃	神田百合枝
	〃	畦浦美矢子
	〃	渋谷義治（新）
	〃	渡辺茂彦（新）
	事務補佐員	柿原弥生
	〃	賀谷サトミ
	〃	志知和子
	〃	平館洋子

編集後記

スタッフや日々雇傭のメンバーは，もちろん人間のことだから，あるときは tention をおこし，あるときは，笑いくずれることもあったが，とにかく，ほぼ予定通りのテンポで仕事をしてきた。

そして，この号で，はじめて，本来のセンターなるものの貧しいながらも初歩の初歩ともいえる方向性をみなさんの前になげだしてみた。これは，今のところ作業や人間関係上のさまざまの体験のなかから，これならやれるだろうと思える，非力のわたしたちのぎりぎりのところである。ようしゃのないご批判とともにご協力を期待している。通信としては，創刊号よりは，バラエティにとんでいると思っているが，これも，みなさまのご協力で，今後一層みのりあるものにしたいと念願している。

なお，センター運営委員・スタッフに上記の通り異動があります。また，前号で，併任事務官植谷忠雄氏の名が落ちてしまいました。お詫びいたします。　（Y. S.）

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報 “センター通信” No. 2 1968年10月1日
発行責任者　宮本　健　　東京都文京区本郷7丁目3ノ1　電代表（812）2111（内線）7831

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
The University of Tokyo

センター通信

No. 3　1969. 4

東洋学とドキュメンテーション

平岡武夫

自然科学におけるドキュメンテーション活動は，近ごろ，きわ立って目ざましい。関係文献が洪水を，それも極めて急激な流れの洪水をなしており，それをタイミングよく，且つ能率よく管理することが，研究の死活にかかわる大事であるのに加えて，複写から分類・計算まで，機械と技術のはなばなしい進歩が，情報の科学を確立させて来たからである。

東洋学においても，やはり第1次文献が激増して，1人の能力または1機関の片手間仕事では処置しきれなくなっている。そして文献類目の編集が主要な仕事になっている。ところが，我々の情報管理には自然科学のそれと大きく異るところがある。

自然科学の情報は，現時点における情報であって，2年3年前の情報は，大部分がおくら入りである。これに反して，我々の情報は年月と共に蓄積されてゆく。すぐれた論文は時間を超えて生命をもつ。したがって我々の情報管理は，2次3次の次元に高まってゆくのでなければ，十分に任務を果すことにならない。これは重い負担である。

それだけではない。自然科学は直接に自然にぶっつかってゆく。その情報も第1次文献から始まる。というよりも，第1次文献というこの名が，実は自然科学の畑で生まれたのである。自然科学の自然にあたるものは，人文科学では人文である。ところで，この人文なるものに，我々は直接にではなく，文献を通してぶっつかるのである。我々は，自然科学者のいう第1次文献より前に，より根元的な文献——典籍——をもつのである。0次文献の名は他に先き取りされているので，これをウルトラゼロとでも呼ぼうか。しかも東洋学ではこのウルトラゼロ文献が莫大の量である。これを管理するためには，文献の綜合的収集・困難な目録の編纂から始まって，資料の分類・索引の編集等々が必須不可缺な仕事になる。現規模の東洋学文献センターにはまさに残酷物語である。

（京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター主任）

今のセンターに望みたいこと

宇　都　木　章

東洋学文献センター案に少し許り魅力を感じたことがある者として，その折に一，二感じた点を中心に，今のセンターへの希望を申し述べて見度い。「センター通信」を通じてしか実状を知らない傍観者であるし，運営や事業の内容に一々関心を持っている者でもないので，迂闊で角違いの議論になるかも知れないが，局外者にはその程度しか了解されていないのだと言うことを研究所の方々に知って頂くことも必要だと考えた。

そもそもセンターの原案が考えられた時，差し当り何れだけ一般研究者からの要望があり，又，その要望が検討されたかは頗る疑わしかった。それにも益して，このセンターが東大，京大，東洋文庫の三カ所を対象とした点……その意味の重要性は認めつつも……見方を違えれば，それぞれに根強い伝統を持ち，かつそれに培われた是正困難な性癖を有するエリート研究所をより充実するだけに終って，一般の多くの研究機関や研究者との格差を大きくする許りでなく，越え難い溝をも掘って了うことになるのではないかとも恐れられた。

事実，センター案は遠大な見通しと，公平にして組織的な制度がその基本に存在しない限り，常に当該研究機関のエゴイズム……私はそれも，現状では大事だと思っているが……の危険に曝される可能性が存するはずである。然しながら遠大な見通しや整った制度を新らしく作ることから始めるためには，伝統ある三研究機関を瞠若たらしめるだけの尨大な予算が組まれるか……又ハゲバ棒ヲフリマワスカ？……或はその可能性を示す充分な根拠がなければ，とどのつまり机上の空論に終ることは，確かである。それは文部省内の一情報室のなし得るわざではないようであった（果してその後，このヒヨワな計画は東洋文庫をさえセンター案から脱落せしめるに至っている）。そこで現実問題としては，将来の大センター企画が行われる時までに必要最少限の仕事に手をつけておくと言うことと，もう一つ三機関が腹蔵ない意見を取り交して問題点を明らかにすべく努めるのは有効であろうと言うのでスタートしたと思われる。こうして各機関は共通の基盤に立って，各々独自の計画に基く方向付けがなされた。

当初から幾多の困難な問題を抱えたまま，その準備的作業を推し進めなければならなかったセンター案にとって，何よりも重視すべき点は精神の持ち方であった。と言ってもそんな大げさな話ではなくて，サービス精神のことである。形式としてではなく，生き方の問題として，この精神の土壌を養っておくことは，これらエリート機関にとって不可欠のことと痛感する。

現在，センターは限られた範囲の小規模な事業の運営という外的制約に縛られているが，それにもかかわらず精神的には無限の責任を負わねばならないはずである。センターとして発足した以上，何時如何なる場合もこれから逃れることは出来ない。センター業務に対する基本的精神態度は，自己自身の内なるサービス精神の確立であると同時に，センターを利用する者の「被サービス精神」を包含してゆかなければならないからである。「被サービス精神」は利用する多くの研究者たちの感覚や考え方だから，言って見れば右から左まで数限りなく，その上矛盾と撞着に満ちている。無理無謀と思われる要求もある。それを積極的に受けとめて，能う限り理解に努め続けることによって，自己のサービス精神を新らしく立て直すことが常に繰り返えされなければならない。従ってそれは拡大してゆく精神態度であり，自己と自己を取りまく環境の閉鎖性を具体的に取り除いてゆく，一種の変革の精神である。

現実的には伝統的圧力や経済的制約という限度に縛られ苛まれ，いつも妥協する以外に道の無い消極的立場にありながら，如何なる機会をも逃さず，その限度を乗り超えようとする積極的態度を形成する力である。

この精神をゆるがせにした場合は，確かに「センター通信」No.2 で危惧されていた通り，①別個に新らしい大センターを構想する以外の方法に対しては否定的になったり，②所員が研究を妨げられると主張したり，③大学の格差を生ずることを恐れたり④「本来あるべき全国共同利用文献センターの設立という理想の実現に対して，悪い既成事実をつくった」とまで言わしめるような無責任な発言……局外者から見れば，センターを引受けた研究所内で，この種の議論に明確な答えを与えないままに，センター業務を実行に移すのは，殆ど非常識の謗りを免れない……が罷り通ることになろう。こんな雰囲気の中でセンター員がひっそりと仕事をしなければならないならば，センターの実は愈々上らないことになるのは火を見るよりも明らかである。

センターの仕事が発足するに当っては，既存の研究体制や図書室体制と矛盾したり，重複したりすることが多いのは当然であろう。それが面倒臭いから新しいのを創れという主張は，新しいセンターが成立した時に拱手傍観して，その欠点と貧弱さを指摘嘲笑する役割を果す以外の何ものでもないであろう。また研究所本来の構成や目的が異なるという御家の事情を以て，センター業務に無理解であるならば，それは最も恵まれた環境にあって，暗黙の中にその権威によりかかって，他を省みない独善主義と判断するほかない。その有する尨大な資料を，あらゆる研究者の便宜に提供したいものと念願し，百方手を尽すということが，通常の研究者ならば，誰でもが抱く，極く常識的な市民的感情であろう。実状に疎い言い方かも知れないが，研究所には進歩的，或は良識的と称される多数の所員がおったにもかかわらず，研究所を開放することすらも放置されて来た如く見えるのは，その進歩的，良識的論陣が空念仏だったと評されても仕方あるまい。

センターの仕事が研究を阻害すると言うのならば，阻害の内容を逐一検討して，これを除去するような方策を立て，両立の実現に最大の努力を払うべきである。そうした主張を貫き通してゆかなければ，結局文部省の予算主義に屈し，センターは事無かれ主義の辯明手段に落入るほかないであろう。多くの研究者が心配している点の一つはそこなのである。

一時も早くこの悪しき伝統主義，御都合主義を払拭して，良識ある市民的精神をもって活動を開始されたい。こうした努力を積み重ね，矛盾と悪戦苦闘しながら前進して，はじめて将来の大センター企画の具体像が生まれ，又適切な処置が考えられるようになるのである。そうしたならば現在，多くの官制機関が，保身官僚主義の中でもがいているような，あの哀れな格子なき牢獄の状態を打ち破り，自由と活気に満ちた有能なセンターの誕生が期待されるであろう。

（青山学院大学助教授）

第4回全国文献センター長会議記事

第4回全国文献センター長会議は，昭和44年2月17日午前10時より，京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センターにおいて，各センター代表ならびに文部省大学学術局情報図書館課立松課長，同学術資料係上島係長列席の下に開催された。

開会後，当番センター長として人文研センター長藪内教授および文部省立松課長より，それぞれ今回の会議の意義について挨拶があり，次いで議長選出の結果，藪内人文研センター長が議長となり，議長の指名によって人文研センター主任平岡教授が進行係となり，議事に入った。

先ず，43年1月19日，一ツ橋大学経済研究所附属日本経済統計文献センターにおいて行なわれた第3回全国文献センター長会議および同年1月20日に日本学士院において行われた日本学術会議と各センターとの懇談会について，一ツ橋センター細谷助教授より，報告ならびに経過説明があり，同年4月15日付で国立大学文献センター長会議が文部大臣に対して提出した『国立大学文献センター管理運営についての要望書』（後掲参考資料A）および同年5月17日付で日本学術会議が内閣総理大臣に対して提出した『文献センターの充実についての申し入れ』（後掲参考資料B）が，それぞれ再確認された。

次に，配布参考資料『国立大学各文献センターの現状と問題点』をとりあげて，各センターの当面する諸問題について，平岡人文研センター主任より，今回の席上で取り上げるべき若干の問題点が要約指摘されそれらをめぐっての各センター側の実情報告ならびに将来計画の説明があり，これに関連しての文部省側の見解が示された。

最後に，44年度各センター予算（内示案）について，文部省上島係長より説明があり，各センター代表との間に，それぞれ質疑応答が行われて，午前の部を終了した。

＊東文研センターの場合は，過去3カ年にわたって措置をうけた設備費（約750万円）が打ち切られ，44年度運営費は43年度運営費査定額にほぼひとしく査定され（336.4万円），この点をめぐっての質疑応答の間に，東文研センターが44年度以降の将来計画を実施するためには，計画に密着した運営費増額要求によって，文部省の理解を求めることが必要であることが判明した。

午後の部は，前回センター長会議で提案され今回センター長会議の宿題とされていた「文献センターのビジョン問題」について，各センターの担当課題報告を中心として，議事が進められた。

先ず，一ツ橋センター細谷助教授より，「文献センター設立の経緯と理念」と題して，昭和30年代後半より今日に至るまでの，人文社会学部門における文献センター設立の経緯が詳細に報告され，当初の理念（学術会議構想）と現在の基本構想（文部省案）との間の差異が再確認された。なお今後の展望として，一ツ橋センターの場合には，日本経済統計分析を中心とする中期ビジョンを——当面は研究活動プログラムと密接な連絡をとりつつ，現在の日本経済統計体系に対する批判をその主要課題とするデータ・アーカイヴとしての機能を果すことが提示され，最終的にはデータ・バンクを目標とすることが示唆された。

次いで，東京大学法学部附属外国法文献センター石原助教授より，「文献センターの体制と組織について」と題する報告があり，文献センターの理念とそれを実現するための機構の整備には，現状認識が不可欠の前提であるとの観点から，外国法センターの実情，その対外機能と内部機構の問題に即した若干の問題点の指摘があり，特に内部事務処理機構の問題点として，センター教官の存在，その身分の位置ずけと将来性の問題等々について，従来の講座制的体系の下での教官としての位置ずけよりは，むしろ調査官ないし研究官とでも呼ぶべき別個の身分として位置ずけるべきではないかという問題提起がなされた。

第三に，神戸大学経済経営研究所附属経営分析文献センター長米花教授より，「文献センターと機械」と題して，主として経営分析文献センターとしての観点から，一ツ橋センターの機能との対比の下に報告が行われた。神戸センターにおいては，一ツ橋センターとは異なって，内容処理分析のためにはもちろん，文献検索のためにもP.C.S.を採用せずにコンピューターを使用しているが，将来の経営分析文献センターの構想としては，やはりP.C.S.を採用しての部分処理も不可欠であり，必ずしもコンピューターを万能視することは許されないこと，特に文献目録作成などを見込む場合には，機械化以前にかなりの手続きが必要不可欠であることが提言された。神戸センターの場合にも，一ツ橋センターの場合と同様に，研究所の研究部門構成との関連において事業計画を推進する予定であり，現状では，一ツ橋センターの場合ほど集中的な目標設定をせず，多機能的な方向を摸索中である，と報告された。

最後に，「東洋学における文献センターの理念と事業」と題して，人文研および東文研文献センターより，それぞれ報告が行われた。先ず，人文研センター市原助教授よりは，人文研センターにおける現状認識として，機械導入前の段階であるが，文献の収集・整理と閲覧・複写サービスを現在の組織規模の範囲内で最大限に実行していること，特に文献の収集は明人文集を集中的に収集してほぼ日本国内での重点目標を達成し，今後は海外および元以前の時代の文集収集へと範囲・目標を拡大せんと志していること，が報告された。またドキュメンテーション作業としては，現在編集・刊行中の『東洋学文献類目』の充実・継続発行の他に，前述した明人文集の収集を基礎とする総合目録ないし編目索引の作成，および書誌学研究文献目録，科学技術史研究目録等々の作成が，研究所研究班の事業と緊密な連絡をとりつつ推進しうる，と報告された。なお，現在の人文研センターの運営上の隘路としては，複写サービスの利用者数の激増とこれにともなうサービス料金における学内学外差額の問題等が指摘された。

次に，東文研センター尾上助教授より，東文研センターにおける第一期第一次計画の漢籍分類目録の作成は，ほぼ予定通り進行しつつあり，今後可能な限り速やかな機会に刊行のための概算要求を行ない，これの刊行を期している。また，第二次計画としては，“広く研究者の利用にたえる目録・索引その他の基礎資料作成・整理・刊行”という点に当面の目標をおき，これを手がかりとして将来のドキュメンテーション活動を摸索中である。

すでに刊行し，また現在編集・企画中の『センター叢刊』は，そのような意図の下に，従来未刊行のために研究者のための共有財産とならずにいたものを刊行の軌道にのせたもので，これは今後も継続して推進する考えであり，センター通信を利用して，広く推薦を依頼している。＊

＊現在編集・企画中のセンター叢刊については，『センター通信』No.2を参照。

ただし，上述の第二次計画を遂行するための課題としては，要員と資金の確保が問題であり，人員の充実・補強と印刷製本費の大幅増額を含む予算措置の裏ずけとが不可欠である，と報告された。

以上をもって，各センターの課題報告とこれにともなう質疑応答を終り，フリー・トーキングに入った。フリー・トーキング

においては，ドキュメンタリストの位置ずけをめぐって，各センターおよび文部省側の見解が，それぞれの角度から討議され，新しい分野としてのドキュメンテーション・センターの中に働くドキュメンタリストを，現在はもちろん将来に向けて，新しい職域にふさわしい新しい体制の中に位置ずけるべきではないかとの示唆があり，また人文研センター平岡主任よりは，文献センターの基本的使命として，学術研究者に対する平等な機会の提供（その一形態としての基本的文献の共同利用）の課題が存すること，が指摘された。

最後に，藪内人文研センター長によって今回のセンター・ビジョンをめぐって提出された諸課題は，今後の文献センター理念の再検討の過程を通じて追究されるべき課題であり，今回の会議を基礎として文部大臣への要望書を提出することが提議，了承され，会議の終了が宣せられた。

≪参考資料≫

A. 国立大学文献センター管理運営についての要望書

昭和43年4月15日

文部大臣　灘尾弘吉殿

国立大学文献センター長会議代表
一橋大学経済研究所附属
日本経済統計文献センター長
山田　勇

人文社会科学の振興策としの文献センターの重要性に鑑み，その管理運営上の苦衷を訴えて，昨年度に予算措置・要員の確保と養成・施設の充実等に関する要望書を提出致しました次第ですが，それにつき色々と御配慮を頂きつつあるやに承わり感銘いたしております。しかし文献センターの運営は，本来の機能を発揮し，内外の要望を充たす必要上，いよいよ深刻な段階にさしかかりますので，ここに重ねて昭和44年度以降への格段の御高配を賜わり度く，以下の諸点について要望を申し上げる次第です。

1. 予算について

資料の継続購入と既住の欠本補充とは文献センターの最低生命線維持を意味しますが，昨今資料の値上がりは殊のほか激しく運営上深刻な危機に直面しておりますので，設立後5カ年次以降についても設備費またはこれに代わるものを是非とも御考慮頂くよう切望致します。

2. 要員について

センター要員の一般的不足の状況については昨年度の要望書に述べた通りでありますが，今や建設準備期を脱けて積極的発展期にさしかかっております文献センターがその業務を計画どおり行なうためには，一層多くの優秀な専門職員を必要とします。その点に関連しまして文献センター業務が一般の大学における研究部門のそれと区別さるべきことは重々承知致しておりすが，人文社会科学の各専門分野でドキュメンテーション活動を展開する上でシソーラスの開発その他理論的・実際的研究事項がなお山積しており，文字通り準研究部門の内容を備えなければなりません。そのため設置と共に御配慮頂いた助手の重要性はいよいよ大きく，したがって助手定員の増加もこの際望まれるところでありますが，とりわけ現在の助教授1・助手2の配置のままでは，確保養成しなければならない優秀な助手の昇進余地がなく，運営上の重大なあい路となりつつあります。これにつき講師定員を追加御考慮賜わることが事態打開の緊要策と考えますので，この点に格段の御配慮を頂くよう改めて要望いたします。

なお，今後の文献センター活動の方向を展望いたします時，その中心となる専門職員は当該専門領域については申すに及ばず隣接する各専門領域の研究動向についても広く関心を持たねばならず，しかも資料収集・情報交換等の面において国際的活動を積極化する必要がありますので，現在配置の助教授定員の上に教授1の配置が強く望まれる次第です。この点も可及的速かに御検討の上御配慮賜わりますよう要望いたします。

3. 施設について

文献センター施設基準の設定とこれに準拠する本格的整備への要望は，前回に申し述べた通りでありますが，資料の逐次的充実とサービスの本格化とは建物の狭あいを一層痛切に感ぜしめるに到りましたので，ここに改めて各センターの経験を基礎とした当面の文献センター施設最低基準の具体的原則を設定して頂き，これに準拠した施設整備への御配慮を速かに実現して下さるよう要望いたします。

B. 文献センターの充実について（申入れ）

庶発第491号
昭和43年5月17日

内閣総理大臣
佐藤栄作殿

日本学術会議会長
朝永振一郎

標記のことについて，本会議第50回総会の議に基づき，下記のとおり申し入れます。

記

日本学術会議は，さきに昭和36年5月17日付庶発第360号をもって，人文・社会科学の振興について，政府に勧告し，その後さらに昭和37年5月15日付庶発第332号をもって，人文・社会科学の振興のために，人文・社会科学総合研究機関の設置について勧告を行なった。

これらの勧告がもととなって，東京大学法学部附属外国法文献センター，一橋大学経済研究所附属日本経済統計文献センター，神戸大学経済経営研究所附属経営分析文献センター，京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター，東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターが設置された。思うに人文・社会科学の振興のためには，今後なお，この種文献資料センターの新設を必要とするものである。他方，前記既存の文献センターの現状をみるに，文献センターとしての機能を維持するための最少限度の文献資料の補充にも事欠く程度の予算措置しか講ぜられず，また，これらの文献センターに必須の要件と考えられる共同利用，文献目録の作成配布，文献複写サービスを行なうに必要な人員，予算，施設も不十分であり，このままでは，共同利用文献センターとしての機能をほとんど果し得ない状態である。

よって，政府はさきの本会議の勧告にそうよう急速にこれらの点を改善されたい。

説　明

1. 各文献センターとも設立当初3年間及びアフターケヤーとして一年間設備費として相当額の予算が附与されるのに対し，第5年次以後は，運営費としての予算が附与されるにとどまり，最低限度必要な定期刊行物の継続購入と既存の欠本補充にもこと足りない状態である。
2. 各文献センターにより多少の差異はあるが，当初の期待ほど学外者の利用が充分で

なく，また，文献複写等のサービスも充分に行なわれてない状況にある。その最大の原因は広く研究者の利用に足る人員の不足にあると思われる。現在各文献センターとも7名の定員が附与されているが，欠員不補充の原則により，現状はそれを下まわる現員を持つのみである。これらのサービスを行なって行くためには最少限度10名は必要であると思われる。

3. さらに，単に人数の増加にとどまらず，各文献センターがその機能を発揮しうるためには，名実とも専門研究者が配置される必要がある。

お　願　い

この号をお読みの際には，センター通信 No.1，No.2 の関係記事を参照していただければ幸いです。これまでおよび将来のセンターの諸活動について，各位の立場よりする積極的な御意見をどしどしお寄せ下さるよう期待しております。なお，センター通信・叢刊の配布に関して，皆様よりのお問い合せがございましたので，この場を借りて一言説明させて頂きます。原則として，センター通信は関係研究者各位個人宛に，センター叢刊は関係研究機関宛に，それぞれ所属機関事務局を通じてお送りしておりますが，当方の調査不備のため，研究者の方や研究機関において，配布洩れや名儀違い，名儀変更等の場合もあるかと存ぜられます。その際には，是非その旨を御一報下さい。早速，追加訂正させて頂きます。

連絡先　東京都文京区本郷7～3～1
東京大学東洋文化研究所附属
東洋学文献センター
電話 (812) 2111　内線7831

編　集　後　記

今回は，前号の「初歩的構想」をうけて，われわれのセンターとは姉妹関係にある京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター主任平岡教授と元東洋文庫職員であり，センター問題に深い関心を持ち続けてこられた宇都木章氏とからの寄稿をあおぎました。両氏とも，御多忙中にもかかわらず，それぞれの立場よりするセンターの現状に対する適切な提言を吐露して頂けたことに深く感謝の意を表します。

また，今回は去る2月に開かれた第4回全国文献センター長会議の記事ならびに関係参考資料を掲載しましたが，国立大学附属の文献センターの実情がおおよそどのようなものであるかという点に，研究者の方々の理解を求めるために，敢えて大きな紙面を割いた次第です。各位の忌憚なき意見，批判が寄せられることを切望してやみません。

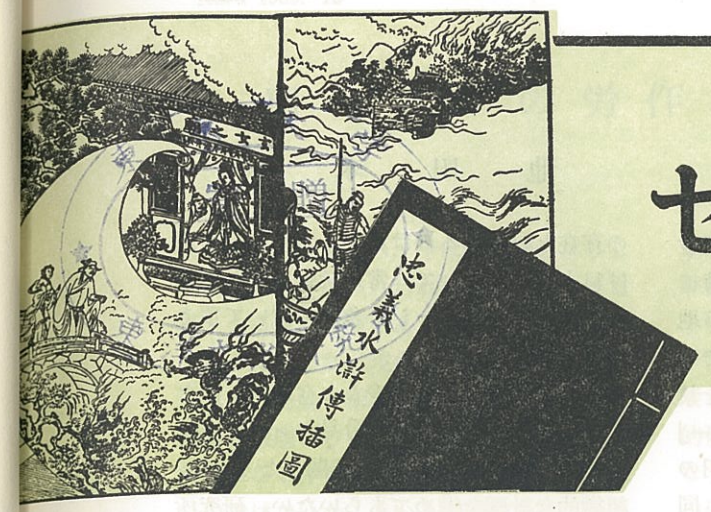
なお，去る3月末をもって，2年間の月日をともにした事務補佐員の諸姉が，センターを去りました。限られた人員と予算によってセンターの本来のあり方を追求すべく，われわれの責任はいよいよ重大であることを痛感しているところです。

(H. S.)

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報 "センター通信" No. 3 1969年4月1日
発行責任者　新井康次　　東京都文京区本郷7丁目3ノ1　電 代表 (812) 2111 (内線) 7831

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
The University of Tokyo



センター通信

No. 4　1969.12

漢籍分類目録について

前　野　直　彬

目録の学は諸学の源流を明らかにする枢要の学であるとは，昔から中国で言われていることだが，いまはその正論を大上段にふりかぶるほどのスペースがない。ただ私が日ごろ考えていることの一つだけを書いてみよう。ことは漢籍のみには限らないようにも思われるが，他の書籍に言及する資格はない。対象はどこまでも，自分の畑の漢籍に限定しておこう。

現在のところ漢籍分類目録は，必要とする書籍の所在や版本の種類などをたしかめるために使われることが多いと思われる。しかし単にそれだけのためならば，分類目録でなければならぬとは限らない。一々出かけて行って蔵書カードを繰る手間が省けるのは大きな便宜であるが，もしも将来，全蔵書をコンピューターに入れておく時代が来れば，それも電話一本で用が足りるようになるだろう。

しかし，その時代になったとしても，私にはまだ漢籍分類目録への興味がある。それは書物を探すために目録を見るのではなくて，目録の第1ページから読んで行くことによって生ずる。読むうちに意外な珍本を発見するのも興味の一つであるが，これはむしろ小さい。分類の方法がすでに編者の態度表明の一つなのであって，それをさぐるのも興味があるが，これは問題がちと大きすぎる。

今の日本には，漢籍の全分野にわたってまんべんなく所蔵している図書館はない。意識的にせよ無意識にせよ，どこかに重点があり，どこかに不足した部分がある。分類目録を読んで行けばそこが明瞭になるわけで，同時にその図書館の性格なり傾向なりも推測できる。あるいは漢籍がそこへ流れこんだ経緯も，ほぼ想像できることがある。そんなことを考えながら，私は分類目録を読むのである。

東洋文化研究所の漢籍分類目録も，やがて完成するであろう。私はいま病中で，とうてい大部の書物とは取組めないが，いずれはそれを＜読む＞日が来ることを楽しみにしている。

(東京大学文学部教授・東洋学文献センター運営委員会委員)

Z
6146

希　望

池　田　末　利

東洋学文献センターの実現は一般研究者にとって喜ばしいことに相違ないが，特に私ども常日頃不便を余儀なくされている地方在住者にとっては何より嬉しいことである。ただ，欲をいえば，なお望蜀の念を禁じ得ないことがある。いったい「センター」とはいうまでもなく「中心」であろう。円の中心は1つで，2つなら「中心」でない。同名の「センター」が東西2つに分れているのはどういうことであろうか。問題の根元は，東西シナ学のメッカであり，メジナである両研究所の附属施設として成立したところにあるようだ。このことについては，既に古島和雄氏が疑問を投じておられる(「通信」2号2頁）が，「本来あるべき全国共同利用センター設立の実現に，悪い既成事実を作った」(同2号6頁）という意見が出るのも無理あるまい。いくら，「基本的使命としての，学術研究者に対する平等な機会の提供」（同3号6頁）などといってみても，「研究所の本務に支障を与えない」(同2号5頁）条件下では限度があろう。私ども，これまで研究所特に人文研の資料はよく利用させてもらって，大へんあり難いことと感謝しているが，主体的研究を本務とする研究所内では，当然ながらよそ者の完全な自由などあり得なかったし，これからもあり得ないであろう。「平等な機会の提供」はあり難いが，研究所の附設機関である以上，サービス者・被サービス者間の精神状況の落差を否定し得ないであろう。更にいえば，研究機関がサービスするというのもおかしなことで，研究所はあくまでその本務の研究に専念すべきである。したがって，本来的にはやはり学術会議が示唆しているように，「壮大センター」の設立が望ましい。両センターがそれと別個の性格の存在といわれるのはわかるが，そんな逃げ口上を吐かないで，常に統合された理想的センターのイメージを念頭に置いて頂きたい。これが第1点。

このことから，当然のことながら，両センターがセクト主義の「分見センター」にならぬよう，緊密な有機的連関をとりつつ，組織的な計画を進めてもらいたい。研究所の附設だから，その事業と連なるものからとりあげられるのはやむを得ないし，また当然でもあろう。明人文集の収集もよかろうし，センター叢刊も大いに結構だろうが，どこまでも個人の好みやご都合主義に陥らぬようにして頂きたいものである。要は東洋学研究はいかにあるべきかということが大前提となろう。このためには，一般研究者の希望アンケートをとるのも一方法ではなかろうか。費用も手間もかかることだが，サービスしてもらうなら，ついでにそのくらいのことはやって頂きたい。これが第2点。

東文研では目下蔵書の漢籍目録編成中とのことであるが，「カード目録」があるといったり，ないといったり，そんなことはどうでもいいとして，いったい(前身の東方文化学院をも含めて）この研究所ができて何年になるか知らないが，今までの大先生がた何をされていたのだろう。センターができなければ作らぬつもりでおられたのか。それとも，漢籍目録作成のためにセンターができたのか。とも角，今からでも遅くはあるが，目録の実現は結構なことである。ところで，「目録作成方式は人文研方式に準ずる」（同2号6頁，傍点筆者）そうであるが，「準ずる」具体的内容は明かでない。由来，東文研には進歩的な学者が多いと聞く。いかにも「通信」には，その*

田仲さんの労作

田　中　謙　二

ことしの3月ごろ，やはり学園のあらしにあふられて，われわれの研究所でも表看板とする共同研究のあり方が問いなおされることになった。現在もなお続行しつつあるみぎの討論の初期段階で，作業と研究の関係が議題にのぼった。研究と称しながら実は単なる作業に終始しているケースが多いのではないか，という問題である。むろん，そのようなことが研究所の研究者として許されていいはずはない。

われわれが対象とする古典学，ことに長久の歴史と広大な地域を擁する中国の場合は，どうしても作業部分に比重のかかる基礎研究が必要である。この研究所のように，本国の第一級図書館にも匹敵しうる尨大な文献資料をもつところでは，ほんらい不可欠なテクストの校勘とか零砕な資料による考証とかが，十分に可能である。それはあくまで正常な研究意欲と問題意識を失なわずに進められるべきで，これらの着実精確な基礎の上に築かれた研究こそ，真に信頼するに足るものとなりうる。ところが反面，テクストの校勘とか資料の蒐集とかに耽溺すると，作業部分が多きを占めるこの基礎的研究に安住して，学問の真の対象を見失なう危険がある。われわれの機関でも従来の研究に筆者を含めて，みぎの疑惑をまねくケースがたしかにあった。

さて，筆者は偶然にも，東洋学文献センター叢刊第2・3輯，田仲一成氏『清代地方劇資料集』に関係することになった。資料の蒐集といっても中国学の場合は，コピー機器の進歩した今日でも，右から左へ簡単に提供しうる性質のものではない。この国の古典では，まずおおむね句読を施すことが要求される。それには蒐集者自身が資料を消化しえていなければならないし，したがって，みずからにその資料を利用する姿勢がなければならない。

筆者が田仲さんの労作を読んだのは，「元曲」を中心とする中国の戯曲乃至演劇を専門とすることにも因るが，この場合はむしろ別の理由のほうがまさっていた。すなわち，筆者は10年ばかり前に，本所の故安部健夫博士が遺された『元典章』のしごとを背負いこみ，本命の研究を進めるかたわら，少なからず苦汁を呑まされた吏牘文にも，関心があったからである。といっても，清代の吏牘文には初めて接したのだが，よくみれば，語彙の違いを除き，その文体には数世紀をへだてる『元典章』との距離があまり認められない。おもわず全体に眼を通すきもちが湧いた。

むろん，吏牘文も中国文であるが，それの解読には特殊な習練が要る。たいへん失礼ないいかただが，わが国の中国学者の間

---

*概念規定を窺知し得ないが，「中国旧学目録」「新学目録」などという耳新しい言葉が目につく。もし，「準ずる」が旧態依然たる経・史・子・集・叢書云々なる旧分類を基本とするものなら，いささか期待外れといわざるを得ない。しかし，それもすでに決ってしまったことなら，精緻な人文研目録を凌駕する正確無比にして検索に便宜なものを，そして清貧に甘んずる私ども研究者の懐ろをあまり痛めない程度の廉価にして頂きたいものである。これが第3点。

以上，勝手な注文を並べ立てたが，無責任とも思われる批判にも耳を傾けてこそ，真の進歩が可能であることをお含みの上，ご寛恕願いたいものである。

（広島大学文学部教授）

には，同文のゆえに，中国文（あるいは漢文）は御し易いという錯覚がいまなお根づよい。いわば外国語であることの意識が稀薄なのである。そういう意識の人たちの盲点を，吏牘文はみごとに突く。1つは中国文言に普遍なリズムの尊重であり，いま1つは俗語（口語）の混用である。

中国語は基本的に単音節語であり，孤立語である。この2つの特性が文章構成にあたって，つねにリズムの流暢，すなわち音節の調和を要請する。吏牘文は文学意図をむしろ拒否する文章であり，それを操る胥吏も文学者ではないが，中国語の必然といおうか，この実用文体にあっても素朴な形でリズムが尊重され，四六文的な偶数言（音節）が重畳される。むろん，その間に奇数言の句を混えて単調を破ることもあるが，基調はあくまでそうである。したがって，吏牘文が訓読法でよまれると，しばしばリズムが無視されて，句読の誤りを犯す。

また，あまり気づかれていないことだがいわゆる吏牘語は俗語的性格をもつ。その原因についてはなお検討を要するが，たとえば供述書を俗語で作成することの必要，文言の概念規定のあいまいさ，胥吏の教養など実務面からの要請のほか，より根本的には文学を目的とする文章との厳別などが考えられよう。それはともかく，過去の中国では，伝統文学である詩文については，『佩文韻府』などの用語例を集めた著作があるが，文学用語と意識されぬ吏牘語は，それからほとんど排除されている。それに辞典の類も，吏牘語に関する限りきわめて不備で用をなさない。

みぎの2つの盲点がやはり田仲さんにも過誤を犯させた。もっとも，田仲さんは現代語に堪能だが，雅俗混淆の文体にとまどわれたらしい。とともに，失礼ながら，校勘に対するあまさも，原書や自身のミスコピーを見落させたとおもう。だが，それよりも筆者が指摘したいのは，実は，すでに言及した蒐集者としての姿勢についてである。ここで筆者は，みずからのにがい体験を告白しなければならない。

既述のように安部博士の遺業をついだ筆者は，数年まえ『元典章』校定本の第1冊を上梓した。まもなく，この最初のしごとが誤り多いことに気づいたのは，ほかならぬ筆者自身であった。筆者とても，出版に至るまでには，本命のしごとも半ば放擲して，前後3, 4年の歳月を『元典章』との格闘に費消した。しかし，この段階における筆者の胸底には，自分はあくまで専家でない，判例集など文学研究と無縁であるという考えが横たわっていたし，俗語文献はかなり読めるという自負があった。まことにおそろしい，この2つの安易な気もちが拭いがたい過誤を犯させたのである。筆者はあらためて1年あまり，毎週1回数時間を割いて，『元典章』を利用する専門の若い学生とともに，既刊の1冊を検討しなおし，相次いで発見されるみずからの過失に，冷汗を浴びる想いに耐えた。このようなにがい体験がまだなまなましい際に，田仲さんのしごとに接しただけに，田仲さんの相似た姿勢がありありと感ぜられた。幸いに筆者は，この研究所の前身東方文化研究所の時期に『尚書正義』『毛詩正義』および「元曲」などの会読に参加して，碩学たちの指導のもとで校勘の神髄にふれえた。ことに，異本の多い「元曲」の校勘では，みずから長い経験もかさねた。こうして，校勘学の要領をほぼ体得していたおかげで，田仲さんの過誤を少なからず指摘することができた。そこで，さし出がましいと思わぬでもなかったが，続刊されることでもあり，姉妹研究所のしごとでもあるので，訂正の結果を田仲さんのもとに送付した。昨夏のことである。居所不明で回送されたのを転任とは知らず，そのままむなしく2，3か月が過ぎたある学会の席上，尾上兼英氏の紹介ではじめて田仲さんに会うことができた。数日後，田仲さんは熊本へ帰任の途中，

わざわざ京都で下車して研究室の門を叩かれた。筆者はみずからのにがい体験を語るとともに，吏牘文解読の要領を披露しつつ誤謬個処を指摘した。そのおり，続集の校正刷りをみてほしいと依頼され，もはや後へは退けなくなった。

2か月後にとどいた校正刷りの分量には一瞬たじろいだが，あの謙虚で篤実な人がらを想い，勇を鼓して眼を通しはじめた。これは驚いたことに，見違えるばかりの進歩である。その後の努力がひしと感ぜられる。筆者には清代の吏牘語の一々を検討する暇はとてもないので，およそ完全にはほど遠いことしか果たし得なかったが，かなりの時間を割いて訂正してあげた。1週間ばかり後，田仲さんはまたも熊本からかけつけ，校正刷りを受けとったその足で，引用原書を再調査するために東上された。やがてとどいた続集には，前集の微細な個処に及ぶ訂誤表が附録されている。過ちを改むるに少しも憚ることのなかった田仲さんの態度に，さわやかな共感を覚えるとともに，敬服の念をもあらたにした。

みぎは田仲さんのしごとと関係をもった経緯にすぎない。筆者はもともと本稿で，田仲さんの労作の利用価値を説くつもりであったし，それが編集者の希望でもあった。しかし，あたえられた紙数はすでに超過し，それに，そのことは，清代演劇史研究の一環としてやはり田仲さんに委ねるべきだともおもう。筆者はただ終りに，田仲さんの率直な，ちかごろ流行することばである，自己批判と決意をつたえて，その学業の前進に期待しよう。

「わたくしらの大学時代は，K教授をつきあげて，なにかと新しい時代の作品がカリキュラムに組まれるよう強要しました。おかげで，いま古文に対する自信を欠き，後悔しています。これからしゃにむにがんばります」

（京都大学人文科学研究所教授）

人文・社会科学におけるコンピュータ利用の将来

関　寛治

2年半ぶりでアメリカに行って見て驚いたことは，その変化の速さであった。それは，ベトナム戦争に対する一般のアメリカ人の受けとめ方の変化のような世論の次元の問題にかぎられているばかりではない。大学のなかの研究状況の変化や，そこで教えている人々の移動のようなものもまた，アメリカでは日本より，はるかに流動的であるように思われた。

そのひとつにコンピュータの利用状況がある。2年半前には，人文・社会科学の学部でコンピュータを使っているところは，数からみて非常に稀なことであったし，またコンピュータを使っているところでも，自分のところにコンピュータを備えつけているというところは全然なかったといってよい。大学のコンピュータ・センターにまで計算のために，IBMカードをもって行って，そこで計算してもらうというのが普通だったのである。

それが，今回行ってみて驚いたことには研究室のなかに2台も大型コンピュータの端末(ターミナル)を設けているところさえあった。またその他のコンピュータ附属機器類を研究目的に応じて配置しているところにも何回か出会ったのである。もちろん私の見たところというのは主として政治学関係の学部であったが，おそらくその他の学部でもにたような状況にあると思える。

私の訪れた政治学関係の学部の例でいうと，ノースウエスタン大学のケネス・ジャンダの研究室はその代表的なもののひとつ

であるように思われた。

ジャンダは世界中の政党の比較研究をしているのだが，その研究室に行くと，工学部の大実験室のようにいろいろの機器が整然とならんでいる。中央には2台の大型コンピュータの端末がおかれており，それは時分割方式（タイム・シェアリング方式）とよばれるいちばん新しい方式のものである。これまでのコンピュータは計算時間がきわめて短いのに，利用するときの人間の介入のために，コンピュータが長時間無駄に1人の人間だけによって独占される傾向があった。時分割方式とよばれる新しいコンピュータは，同時に数百の端末をひとつのコンピュータに接続し，数百のその端末の前に坐った同じ数の利用者がほとんど同時に計算できるという驚くべき効率の高いものなのである。実際のコンピュータの計算時間はせいぜい数秒を出ない。また多くの利用者はそれほど頻繁にはコンピュータを使わない。この点を利用して，事実上，数百人の利用者が同じコンピュータを別々の端末から使えるというわけなのである。

私がためしにジャンダのところの端末をスタートさせると，はじめにビジー（使用中）というサインが出た。どこかの端末が計算していたのであろう。そこで2，3分おいてスタートさせてみると，レディ（計算受付）というサインが出た。コード表から日本の政党の派閥というコードをあらかじめ探しだしていたので，その数字記号のボタンを順次おすと，たちまち，総頁539と出て，次いで，次から次へ文献のリストが連続的にテレビの上に出てくるのである。次にプリント（印刷）というボタンをおすと，日本の政党の派閥について書かれたマイクロフィルムのコピーが別の機器から，印刷されて出てくるというわけである。この間，ほんの1分くらいのものであったのには驚かされた。

もちろん日本の政党の派閥に関する文献の内容までほしいときは，別の機器を用いてさらに操作しなければならぬというわけであるが，539頁のコピーをとるのにせいぜい数分ですんでしまうという驚くべきスピードである。この研究室では，マイクロフィルムの機器を時分割方式の高能力のコンピュータによって制御し，コンピュータの能力がいかんなく研究者によって利用されているといってよい。

この方式の開発が2年半前にすでに開始されていたのを私は知っていたが，完成されたシステムを見て，これは日本の大学でもボヤボヤしてはいられないと，あらたに感ぜざるをえなかった。

東洋学文献センターが，今後どういう方向に再編成されて行くか，まだわからないところが多いが，長期的な視野でながめるとき，東洋学文献センターにも，必ずコンピュータの導入が必要なものとして考えられるようになるにちがいない。コンピュータの導入は研究組織と活動のありかたとを根本的に変える。それに対する心構えを準備しておくことが，研究者にとっても研究補助者にとっても，きわめて必要であるように思えるのである。　（東大東研助教授）

お　願　い

○センターが存在していることを知らない研究者がまだまだ多いようです。ひとつには，当方の広告不足でもありますが，「センター通信」が東洋学に関係する研究者全員に配布されたならば，この問題は解消されるはずです。皆さまのお近くに「センター通信」の届いていない研究者がございましたら，御一報くださることをお願いいたします。早速お送りいたします。

○「センター通信」は皆さんの声を積極的に掲載し，センターの諸活動を皆さんにお知らせするためにあります。どしどしご意見や希望をお寄せくださるよう，期待しております。ご投稿の際は，1,400字以内にまとめてください。

送り先：〒113 東京都文京区本郷7—3—1
東京大学東洋文化研究所附属
東洋学文献センター
Tel (812) 2111 (内) 7831

農村でのデータ収集について

——イランのむらで——

大　野　盛　雄

むらで起った大事な出来事は，すべてキャドコダーの判断で処理されるのが，この国の普通のならわしである。私がむらに入るためには，まずこのキャドコダーに会わなければならない。私が滞在してよいかどうかは，彼の考え方一つで決められる。キャドコダーというのは，もともとむらに不在のマーレキ（地主的なもの）がむらを支配する要として，村民の中から選んだ人物のことであるが，現在では政府による末端統治の出先，つまり村長としても任命されている。だからキャドコダーは，マーレキと政府と村民という三者のいずれの代表でもあるという立場をとらされており，むらにおける生産だけでなく生活にかかわるおよそすべてのことが，この人物の監督下におかれている。

ベヘジャットアーバード＝むらの場合はマーレキたちは80キロメートルほど離れた大都市エスファハーンに住んでおり，やはりキャドコダーにはむらの長としての強い権限が与えられている。しかしこのキャドコダーはエスファハーンにも家をかまえ，マーレキたちとつねに接触を保ちながら，自分も小さな商売をしていて，むらを留守がちにしている。というのはキャドコダー家族キャリミー一統は，このむらにもっとも古くから住みついた集団で，現在もむらの中で一番強い発言権を握っており，キャドコダーが不在でも，その役割は家族のたれかが果してくれるからである。とくに彼の伯父のハージー＝ベラートは，リーシェセフィードつまり長老として，事実上むらのすべてのことをとりしきっている。ハージーとは聖地メッカに巡礼にいってきたものに与えられる称号である。私がエスファハーンにある開発局支部の役人に案内されてジープでこのむらをはじめて訪れたときに真先にあたふたと飛び出してきた人物が，このハージー＝ベラートだった。

油ぎった赤ら顔をして，小太りのこの男は，年の頃55～6，3人の妻をかかえ，20才を頭に13人の子持ちである。日本の袴に似たものをはき，アメリカから輸入された古着のセビロの上衣を着，頭には縁のない黒いフェルト帽子をかぶり，右手にはいつもじゅずと同じようなタスディーグを持ち，その玉をいじる指は休みなく動いていた。役人など，これはえらい人で，もてなさなければならないと判断すると，いかにも自分がつまらない者だという表情を躰中にただよわせながら，しまりのない目鼻だちをいっそうなさけないといったものにしてみせる。落着かないもの腰とおどおどした言葉使いはこっけいにさえ思える。かりにペルシャ語を日本語にたとえれば，漢語に当るのはアラビア語で，教養のある者は会話の中にやたらにアラビア語の単語を混ぜたがる。役人がアラビア語の単語を多く使い出すと，ハージーはしまりのない口を余計しまりなく開けて，目をしばたたいてみせる。

こうしたハージーの表情は，私にとっていかにもイスラム教徒のむらの第一印象を象徴的に示してくれたように思えた。そしてイスラム農村について話をするときに，いつでもこのハージー＝ベラートの顔と仕草がすぐに目に浮ぶ。ところが，2～3日も彼と生活をともにしている間に，しまりのない彼の顔が，うって変って厳しい表情をするのを何度となく見かけるようになった。それはむらのリーシェセフィードとし

て村民にたち向うときであった。なにか出来事が起ったとき，彼は瞬間私が傍にいることを忘れて，村民に厳しく命令を下す。そのときには，むらの社会経済構造を前提としたキャドコダーの権限がまざまざと現れる。それまでのおどおどした態度からは信じられないほどの殺気だった姿勢で，必要ならむらの端までも飛んでゆく。

こんなときには，むらの中にいる調査者としての私がどんな位置におかれているかをつくづく感じさせられる。「むらを調査し，データを収集する」と気軽にいっても，それはけっして容易なことではない。第1に調査者としての私自身が，むらといかなる関係のもとに，どんな紹介をもってはいるかということが問題になるわけである。それにはさしあたり3つの筋が考えられるだろう。まず村民，とくにライヤット（小作的なもの）のようにマーレキの支配下にある農民との知り合いを通してむらにはいるという筋がある。この場合私のような異教徒でしかも外国人が，こうした農民ベースでむらにはいるときには，たんなる私的訪問者としては受けいれられても，それ以上のことをこちらが望むことは不可能である。農民は政府やマーレキに対してつねに不満をいだいているにもかかわらず，政府やマーレキの紹介の筋を通さない限り，むらの公的なことについては話してくれない。それではマーレキに紹介してもらう筋の場合はどうであろうか。今度は私は農民に対してはたしかに保証された人物ということになるが，明らかにマーレキベースで，いわば上から見下ろすように農民に接することになってしまう。農民は反撥を潜めながら私をとりもってくれることが手にとるようにわかる。政府筋の紹介によってむらに入る場合もまさにこれと同じである。この場合は農地改革が進められているという状況のもとでは，村民はマーレキの悪口をあることないこと私に話したがるといった具合である。

私はむらにはいる場合には，以上の3つの筋のいずれかを選んで，キャドコダーに面接しなければならない。政府とマーレキと農民に対してそれぞれの顔をもつキャドコダーは，私に対してそのうちのどの顔をして私をどう処遇したらよいかをきめるわけで，むらにはいってからも私は彼によって保証されると同時に，つねに彼の監視下におかれることになる。したがってたとえむらにはいれたとしても，農民とのつきあいの中における私の客観的な立場というものは，観念的には考えられても，実際にはありえない。だから客観的なデータを収集するということには，当然のことながら限界がある。私はこうした限界を前提としながらも，収集したデータをどのようにして客観性をもったものに補正してゆくかということに最大の努力を払わなければならないわけである。

（東大東研教授　東洋学文献センター運営委員会委員）

東洋学文献センター決算書

—— 昭和41・42・43年度合算 ——　（単位，円）

予算		決算	
設備費	21,687,000	設備費	22,237,057
		（内訳）図書資料費	16,459,459
		機械器具費	5,777,598
運営費	9,137,000	運営費	9,311,932
		（内訳）図書資料費	1,200
		消耗品費	2,386,728
		賃金	5,335,525
		出版費	903,080
		その他	685,399
計	30,824,000	計	31,548,989

故仁井田陞博士の蔵書について

植谷忠雄

仁井田陞博士がご逝去（1966. 6. 22）になってから早くも3年余りになる。先生ご逝去の年の秋，奥様から，先生ご遺愛の図書資料類を一括東洋文化研究所に収めて頂きたいとのお話があり，相談の結果これをお受けすることになり，当時まだ大塚にあった研究所に移して徐々に整理にとりかかった。

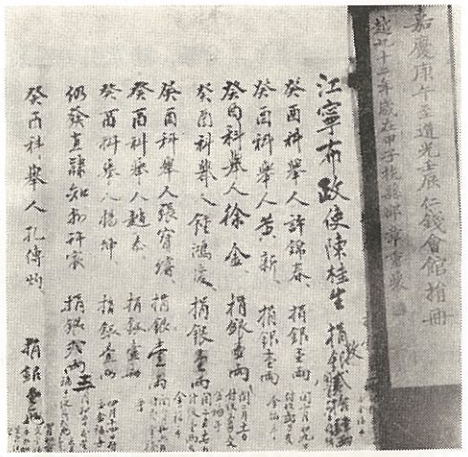
これらの図書資料は旧中国の社会を知るために極めて重要なものであり，先生のご研究に密着したものばかりが項目ごとに集中的に集められている。また残巻零葉といえどもゆるがせにすることは出来ない。まことに先生あってはじめて集まったの感が深い。

その数は中国書約5,200冊，和書約2,200冊，洋書約120冊，清代公私文書類900余点，碑文約50基の拓本である。

先生は研究所の蔵書との重複をつとめて避けられたのであろう，その約半数は研究所に所蔵しないものである。

主な項目を挙げると（紙面の都合でいちいち書名まで挙げ得ないが），唐律疏議を軸として明清律・近代司法制度に及ぶ法律書が最も多く，清末民国の地方自治制度，地方志雑地志，江南から広東に及ぶ30余部の明清代族譜，40部以上もある会館録，同業同族同郷結合の規約類，郷約保甲，義田義倉，救卹授産，文集，戯曲小説，雑礼宗教民俗類等のほか，明代を主とする通俗百科文範の類が40余部もある。民国以来のものでは法律政治経済関係のほか，農村慣行調査報告の類から，さらに現代中国の制度類におよんでいる。

また1千点に近い文書類では，牙帖執照の類，不動産の売買質入れ・各種借銭・北京街巷の売水権等の証文類など，細分すれば50種近くに上るであろう。



写真は故仁井田博士所蔵の会館資料

拓本類では北京の東嶽廟・精忠廟・薬王廟や，会館・公所などに祀られた行神のそばに建てた碑文で，約15業種50基があり，同業結合の研究資料として他に類がない。

以上のほか大量の雑誌学報類もあるが，これはいずれ研究所所蔵のものと調べ合わせながら整理してゆくこととしたい。

研究所の中国資料の収書歴の上では，かつて大木文庫（主として旧中国の法律政治経済社会），双紅堂文庫（明清戯曲小説）があり，下中文庫に続く戦後新刊書の収集があった。今回仁井田先生ご遺愛の図書資料が分散せず全部が研究所に納まり，他にかけ替えのない資料として今後多くの内外学者の利用に供されることはまことに意義深く，研究所の資料充実の上に一時期を画することとなるであろう。

（東洋文化研究所図書掛長）

昭和45年度以降10ケ年の刊行計画

本センターは，目下，関係各方面の諸先生の暖かい助言に勇気づけられて，東洋学におけるドキュメンテーションという新しい分野の開拓に努力を重ねつつあるが，厖大な原資料の山を前にして，手をこまねいているというのもまた現実である。山はやはり下から征服すべきものなのであろう。

資料の収集に始まり，分類，諸索引の編集という低次のドキュメンテーションを経たのちに，はじめて高次の諸要求に応える作業も可能になる。

本センターでは，漢籍分類目録の作業が一段落した昭和44年の春から，『センター叢刊』の刊行に本格的に着手した。これは東洋学における基礎資料を整理，分類して出版するもので，個人または共同の研究の過程で生まれる場合もあるし，センター・スタッフの作業の成果である場合もある。センターの機構が整備され，スタッフがドキュメンテーションに習熟するにつれ，後者の比重は飛躍的に増大するであろう。

センターでは，(1)中国古典法制・戯曲・小説類，(2)現代中国刊行資料，(3)現代朝鮮刊行資料に重点を置いて資料収集を行なっている。これはまた，東洋文化研究所の蔵書の傾向とも一致する。いきおい，『センター叢刊』も収集資料の傾向を反映したものになろう。

以下は，昭和45年度以降10ケ年の刊行計画であるが，あえて青写真のまま公開したのは，ひとえに諸先生の叱正を期待して止まないからである。

○　　○

〔Ⅰ〕 東洋文化研究所漢籍分類目録坿書名人名索引の刊行

〔Ⅱ〕 センター叢刊の刊行

(1) 朝鮮研究文献目録索引
(2) 仁井田文庫目録
(3) 日本文による朝鮮研究文献目録（1868～1945）（論文篇）(1)～(7)
(4) 魯迅全集注釈索引
(5) 李大釗著作・研究論文目録（坿選集未収初期論文）
(6) 和刻本唐人別集目録
(7) 東洋文化研究所漢籍分類目録作成経過報告
(8) 蕭紅年譜
(9) 西廂記校刊表(1)～(5)
(10) 六朝志怪小説定本(1)～(2)
(11) 許地山蔵書目録（在NUA図書館）
(12) 東洋文化研究所所蔵準漢籍，仏書目録
(13) 歴代詩話地名人名索引
(14) 明清政治・法律文献所在目録
(15) 古小説鈎沈地名人名索引
(16) 中国プロレタリア文化大革命に関する諸資料目録付貴重重要文献資料原文(1)～(10)
　1. 楊献珍・周谷城・羅爾綱批判関係
　2. 中間人物論批判他文芸整風関係
　3. 呉晗・田漢批判関係
　4. 三家村批判関係
　5. 彭真批判関係
　6. 陶鋳批判関係
　7 宋任窮他各省級第一書記批判関係
　8. 劉少奇批判関係（Ⅰ）～（Ⅲ）
(17) 復刻撫豫奏稿
(18) 時報記事分類索引（Ⅰ）
(19) コミンテルンドキュメント所収中国関係記事索引
(20) 東洋文化研究所所蔵中国古文書図録(1)～(5)
(21) 左翼作家連盟機関誌（1930～37）論文作品総目録
(22) 類書引用書索引
(23) 郭沫若著作研究文献目録
(24) 楽府詩集総合索引
(25) 小説月報（1910～31）論文小説戯曲翻訳作家別総索引

なお，いままでに刊行されたセンター叢刊は全部で5種，3種が印刷中である。

〔既刊〕

第1輯　新収図書目録（昭和41年度）
第2輯　清代地方劇資料集(1)華北篇
第3輯　清代地方劇資料集(2)華中華南篇
第4輯　周揚著訳論文周揚批判文献目録
第5輯　郁達夫資料（作品目録・参考資料目録及び年譜）

*

センター利用のしおり

東洋学文献センターはあらゆる研究者の利用できる機関として，当研究所に設置されました。センターが発足いらい，いまなお総力をあげて，研究所所蔵の漢籍分類目録の作成に努力していますのも，ひとつには研究所所蔵の漢籍をひろく学外に公開し，おおいに利用していただくために，最低限の必要なことだからでありますが，ふたつには，将来要求が高まるであろう東洋学に関する文献の参考調査の依頼に応えなくてはならないという責任を感じているからに他なりません。東洋学の文献について調査するためには，漢籍分類目録は不可欠のものなのです。というわけで，現在，数少いスタッフではありますが，漢籍分類目録の刊行めざして努力を重ねております。いきおい，閲覧，複写の業務を研究所図書室に依頼していますが，将来は，もっと利用者の方々にとって便利な方法が採られることと思います。

○　　○

〔閲覧〕

1. 所属機関の長の紹介状と身分証明書をセンター事務室か，直接研究所図書室の出納掛に提出してください。
2. 学生の場合は，指導教官の紹介状と学生証を図書室の出納掛に提出してください。
3. 機関に属さない研究者，または地方在住の研究者で機関の長の紹介状をもたずに見えられた場合には，一応，センター事務室に御相談ください。できるだけの御便宜をはかります。

〔複写〕

1. 研究所図書室出納掛の手元に複写のための図書借用願が用意してありますから，必要事項を記入して，図書掛長の許可を得てください。
2. 図書掛長の許可した図書については，学内の複写センターで各種の複写ができます。
3. 地方在住の研究者で複写を御希望のかたは，センター事務室に御照会ください。

〔参考調査〕

1. 東洋学に関する文献について参考調査を依頼されたいときには，センター事務室に備えてある参考調査依頼票に要点を記入して，掛に提出してください。
2. 地方在住の研究者の場合は，書面に要点を記入のうえ，センター事務室に郵送してください。
3. 現在，参考調査のできる範囲は次のとおりです。
　a）漢籍の所在について。例えば，「唐百家詩」という書物はどこへ行ったら見られるかという質問には，東京なら内閣文庫，京都なら京大人文科学研究所へ行けば見られると答えることができます。
　b）研究所の漢籍について。例えば，研究所にある「女仙外史」はどんな書物

*〔近刊〕

第6輯　日本文による朝鮮研究文献目録（単行書篇〔上〕）（印刷中）
第7輯　明刊元雑劇西廂記目録（印刷中）
第8輯　日本文による朝鮮研究文献目録（単行書篇〔中〕）（印刷中）
第9輯　日本文による朝鮮研究文献目録（単行書篇〔下〕）
第10輯　新収図書目録（昭和42・43年度）

かという質問には，清の呂熊の著，釣璜軒原刊本，全百回，永楽年間の唐賽児のむほんをふえんした小説，と答えることができます。

c）最近の研究論文について。例えば，中国の戸籍に関する研究論文にどんなものがあるかという問い合わせには，○晋南朝の戸籍と客戸（越智重明：社会経済史学32—5・6）○敦煌戸籍の一男十女について（古賀登：古代学12—2・3）等々がある，と答えることができます。

〔刊行物〕

1. 利用者の御意見を載せるとともに，センターの諸活動を利用者にお知らせする「センター通信」を発行しています。御希望のかたは，センター事務室に御照会ください。
2. 主要なドキュメンテーション活動として「センター叢刊」を刊行しています。いままでに5種類が刊行されました。（10頁参照）原則として機関あてにお送りしていますが，若干部数を個人の希望者に差しあげていますので，御希望のかたは，センター事務室に御照会ください。

〔利用時間〕

平　日：午前9時30分～午後4時30分
土曜日：午前9時30分～正午
○日曜日・国民の祝日・年末年始と業務上特別の事由がある場合には，予告掲示のうえやすませていただきます。

○　○

センターの利用に関しては，東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター利用規程がありますので，参考にしてください。（「センター通信」No. 1 所収）

このセンター利用のしおりは，本学以外の研究者および学生を対象にしてつくったものです。

編集後記

○　ふた月も予定がおくれましたが，ここに通信第4号をおおくりいたします。センターが実質的に動き出してから今月で満3年になります。第1期の事業計画もぽつぽつ見とおしがたってきました。来年，再来年の両年度にわたって「漢籍分類目録」「漢籍分類目録書名人名索引」を出版する予定ですが，これらが刊行されたとき，センターの第1期事業は完成するはずです。ようやくにして，センターも軌道にのったという感を深くしています。

○「漢籍分類目録」がいつ出版されるかと，首を長くして待っている研究者の数は非常に多い。巻頭文は，研究者の「漢籍分類目録」刊行に寄せる期待の一面を語っていただくということで，前野先生にお願いいたしました。先生は，分類目録カード作成段階から，いろいろと御指導くださったうえに，病気療養中にもかかわらず，心よく執筆してくださいました。ほんとうに有がとうございました。

○　センターが軌道にのればのるだけ，各方面のセンターに対する期待もまた増すでしょう。池田先生の「希望」はスタッフ一同よく肝に銘じて，センターの運営に当りたいと思っています。

○　センター叢刊の刊行はセンターの主要な事業として，これから永遠に続くものと思われますが，本号には，早速，叢刊第2・3輯の「清代地方劇資料集」（田仲一成氏編）について，田中先生の玉稿をいただきました。折から，大学問題の渦中にあって，すっかり健康を害されておられたにもかかわらず，また度々のあつかましい催促にもお気を悪くせずに原稿をお寄せくださいましたことを心から感謝いたしております。

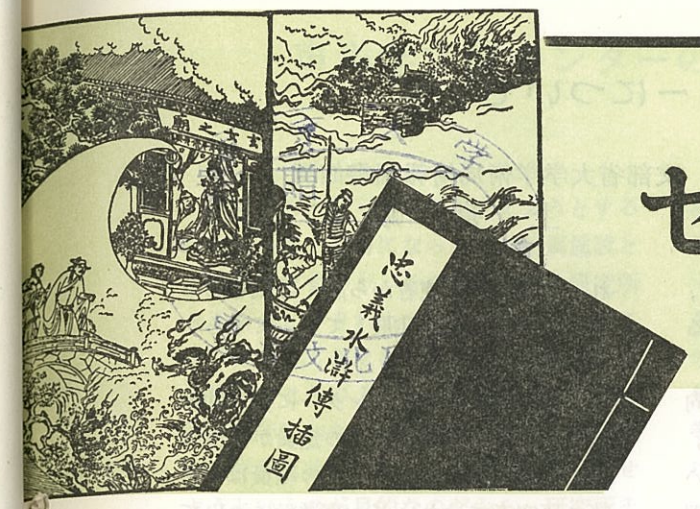
○　本号にはまた，当研究所の先生がたをおわずらわせして，長期的視野に立ったセンターを考えていただきました。関先生の「コンピュータ利用の将来」，大野先生の「農村でのデータ収集について」がそれです。前者では文献資料の整理について，早晩コンピュータの導入が予測されること，後者では，文献そのものについての固定観を打ち破る必要があることなど，多大の御教示をうけました。

○　センター発足以来満3年ということで，本号に，3年間の決算書を載せておきました。（M.C.）

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報“センター通信”No. 4　1969年12月20日
発行責任者　新井康次　　東京都文京区本郷7丁目3ノ1　電 代表（812）2111（内線）7831

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
The University of Tokyo



センター通信

No. 5　1970.6

センター長を辞するにあたって

小口偉一

東研の東洋学文献センターも設立以来5年目にはいって，いよいよ軌道にのってきたといえよう。この間には，すでに公表されているように，幾多の基本的な問題が提起されてきた。とくに外部からの批判や期待には，いまだ十分に応えていないという見方もできるので，順調に発展しているなどというのは，きわめて楽観的だといわれるかもしれない。しかし私としては，センターに関して設立前から重要な任務を与えられていたので，それだけの感慨がないわけではない。

まず設立前には，図書利用をめぐって研究所自体の閉鎖性が非難されていた。附属施設として文献センターが設置されれば，このような非難や批判は解消するとおもわれ，その公開利用の範囲も「アジア研究文献センター」という名称にすることによって，研究所本来のありかたに即しうるし，またより広くサービスしうると考えた。だが，このような名称のセンターは，日本学術会議の勧告どおりにするという規制をうけて実現しなかった。ところで，同じ名称のセンターがふたつあるのはどういうわけか，京大人文研センターと東研のそれとの相異点はどこにあるのか，というような質疑を関係当局からうけるようになり，あらためて両センター間の協定が必要になったのである。同時に，研究所とセンターとは一体であるという文部当局のうけとめかたがある一方，大学の附置研究所のなかにセンターという全国共同利用施設がおかれていることなど，運営上の問題も起ってきた。しかも4年目からは設備費が打切られたため，当然，研究所とセンターとは密接な関係をもって運営に当らねばならなくなった。

現在，センターでは，独自になしうる作業としてセンター叢刊の刊行と漢籍目録の作成に着手しており，また京大人文研のセンターとの連絡もいっそう密接になっている。ドキュメンタリストの育成など将来計画は残されているが，これまでの成果はすべて現在のセンター主任をはじめ関係者の努力によるもので，私自身はあまりにも微力であった。私のなしえたことといえば，研究所の玄関に「東洋学文献センター」という標札の文字を書いたことにとどまるのである。

（前東京大学東洋学文献センター長）

Z
6146

東洋学文献センターについて

文部省大学学術局情報図書館課
上　島　順　二　郎

1　文献センターは，大学の単位をこえて，学内外の研究者の共同利用を目的とする学術情報の流通をはかる一施設として，人文・社会科学の振興と新しい研究動向に即応して設置されてきたものである。一口に学術研究のための情報の流通といっても東洋学では何をすることなのか理解し難いので，この際学内外の研究者に望みたいことは，現在，センターが将来の事業計画として検討している，わが国の漢籍総合目録の編纂や東洋学関係のドキュメンタリストの養成について，研究者が温かい目で見守り，協力されるとともに，センターが何を果たす機関かを真剣に考慮していただきたいことである。

2　東大・東洋文化研・東洋学文献センターは，発足以来，研究所と一体となって研究所所蔵の漢籍の目録の編集に力を注ぎ，刊行できる状態に仕事が進捗していることは誠に喜ばしいことである。この編集作業は，恐らく大変面倒な困難な仕事であったことであろう。考えようによっては，文献センター設置以前において，研究所の仕事として行なわれるべきものであったとも言えるのではないか。何か外部にはわからない内在する問題があったのかも知れない。

これを切抜けたことは，研究所およびセンターの努力と，それを助けた編集補助関係者のチーム・ワークによるものであったと思われる。漢籍目録の編集・刊行が，センター設置の所期の目的の一つであったことを思えば，その意義は極めて高く評価されてもよい。

今後とも，このような相互の協力によって，一歩一歩目的とする事業が達成され，学内外の研究者から高く評価されるセンターとして，発展していってもらいたいものである。

3　現在，東洋学文献センターには，助教授1，助手2の研究系列の定員が配置されている。これらセンターの職員は，純粋の研究者ではないが，東洋学について高度の専門的知識を有する職員であり，研究者と一体となって，常に研究者の研究動向を把握し，自らも資料研究を行なっていかなければならない。

センターが，今後発展するかしないかは，ある意味では，センターに研究系列の有能な職員を確保できるかどうかにかかっているといっても過言ではない。

したがってセンターの設置母体である研究所等においては，これら職員の研究部門との交流を進める道を，センター発展のために考慮されることを望みたい。

4　センターの事業目的の一つである資料収集については，今後学会等の外部の意見を徴し，東大，京大，東洋文庫等，わが国の東洋学の主要機関で十分協議し，各センターとも，収集資料の特色を出し三者の新着目録等を半年に一度ぐらい印刷，刊行していただきたいものである。

昭和44年度のセンター長会議は，本年2月13日に，東京大学・東洋学文献センターで開かれました。議事内容は，次号で報告の予定です。

昭和45年度のセンター事務連絡会議は，それをうけて5月1日神戸大学・経営分析文献センターで，施設要求に主題をしぼって開かれました。

東洋学文献センターの現況

日　比　野　丈　夫

設立いらい近く6年目を迎えようとするにあたって，顕著になったのは附属施設としてのセンターと，その母体である研究所そのものとがきわめて密接に協力ができるようになってきたことである。これはしごく当然のことのようだが，センターは研究所が長年にわたって集積してきた文献資料を，学界に共有財産として公開し利用させようというのが目的なのだから，研究所そのものとは立場が違う。しかし，われわれの人文科学研究所の東方部はこれまでこうしたサービスを全然しなかったかというと，決してそうではないのであって，東方文化学院京都研究所時代から，たびたび所蔵漢籍目録を編集出版し，東洋史研究文献類目を毎年継続して出してきたのである。

もともとこれらの事業は，何人かの所員が研究のかたわら貴重な時間をさいてやってきたのであって，その苦労が並大抵のものでなかったことはよく知られている。センターが設立されると，まず東洋史研究文献類目がそのしごととして取上げられ，東洋学文献類目の名のもとに1年間の遅れまでとりもどして順調に歩み出した。このことは研究所内部だけではなく，学界に安心感を与えたに相違ない。しかし，対外的なサービスを重要な目的としているセンターの現人員では，とうていまかないきれないので，文献類目の編集にはセンターが主体となり委員会をつくって，研究所東方部の全員がこれに協力するという体制をとることとなった。このほかに漢籍の整理分類を目的とする漢籍委員会というのがあって，センターからはほとんど全員が参加してそのしごとに協力している。これには研究所以外の人々も加わって，漢籍処理の実習ともいうべきものが行なわれているのが特徴である。研究所の漢籍目録の補訂や続篇の編集などは，ここが主体となって進められるであろう。

センターのサービス関係のしごとは年々多くなり，昭和44年4月から45年1月までの閲覧者総数は1,662人を数え，そのうち外国人は1,083人に上る。ゼロックス，写真等による複写は実に348件に上った。これは現人員の能力限界を遥かに越えている。

それにもかかわらず，センターが本来の任務として進めなければならないのは，関係文献の出版・所蔵等についての現状認識と，時代の進展に応じた必要資料の整備である。いうまでもなく，内外研究者の専門的質疑に対して責任ある応答をするための用意なのであって，そのためにはいちおう学界の研究状況にも通じておらねばならない。今日の東洋学界においては研究者そのものがドキュメンタリストを兼ねていることが多いが，これは将来研究の進歩のためにも，独自に開発すべき分野である。そこで今日われわれが，さしあたって考えているのはつぎのような調査事業であって，その実施には相当の長期計画が必要であると思う。

まずあげられるのは，国内における学校・図書館等所蔵の文献調査である。歴史的にみても日本全国における東洋学文献の蒐集はきわめて尨大な量に上るので，地域を分けて東大の東洋文化研究所の東洋学文献センターと連絡して行なえれば都合がよい。もちろん，これには各所蔵者の好意的な協力が得られなければ不可能なのであって，センターとして直接調査しうる範囲は限られている。具体的にいえば，全国的なネットワークによって逐次目録がつくられ，センターの手で総合目録が編集されることが理想的である。その間に漢籍整理の能力水準が全国的に高められ，研究者は文

献採集のためのむだな労力を費やすことなく，地方にあっても身近かな資料を十分に活用できることが期待されるであろう。

つぎに海外調査であるが，小部分の細密な専門調査は今まで何度も行なわれているが，広汎な一般調査という点では欠けるところがあった。学校や図書館の設備・利用状況などの視察だけではなく，世界的に漢籍蒐集の現状，各蒐集の特徴等を確認するとともに，できる限り広い範囲でそれらの機関と連絡を緊密にして情報交換を行なうことが必要である。現在，中国から台湾にもたらされている文献のごときは質，量ともにすばらしいものであるが，国際的な協力によって少しづつでも，その公開利用の途がひらかれるようにしたい。さらに欧米，とくに近代文献においてはアメリカの蒐集が注目される。アメリカではワシントンの研究図書館協会に，中国研究資料センターという組織があって，とくに現代文献の調査，目録の作成，稀少資料の複製などが行なわれている。こうした海外機関との連絡，交流が，将来センターの重要なしごとの一つとなるわけである。

とりわけ海外のばあいは，文献の所在を確認するにとどまらず，必要なものは重点的にマイクロフィルムにしてセンターに設備しなければならない。それは国内の交通不便なところにある図書館や個人の蔵書についても同様であるが，これこそわずかな文献採集のために，海外にでかける労力とむだな費用をはぶくことになる。20年近くもまえ文部省の援助と財団法人東洋文庫の努力とによって，大英博物館のスタイン発見敦煌文書のマイクロフィルムがもたらされた結果，日本の敦煌研究が格段の進展をとげたことは周知の事実であろう。このような基礎的なしごとはまだまだ残されているのであつて，これに対してわれわれも積極的な協力体制をもたなければならない。

終わりにふたたびセンターと研究所との関係にたちもどると，従来もしその間に何らかの阻隔があったとしたら，それは相互理解を欠いていたからである。研究機関としての研究所そのものと，サービスを重要な任務とするセンターが両立しないと考えるのは誤りであって，お互いに専門の文献に対する熱意と愛情とがあれば，それが両者を結びつけ，相携えて発展する媒介となるのは当然のことであろう。一例をあげれば，人文科学研究所の東洋学文献センターが創立いらい意欲的に集めてきた明人文集の写真が，すでに824種に上ってわが国はじめての蒐集となり，これが研究所に近年とくに盛んとなってきた明代研究に対し，有力な支柱の一つとなっているのを見のがしてはなるまい。（京都大学人文科学研究所教授　東洋学文献センター主任）

東洋学文献センター（東大）の近況

第１期第１次事業計画の漢籍分類目録は，現在専任スタッフの手によって整理・原稿化の作業が進められている。分類方式は，京大人文科学研究所漢籍分類目録に拠り，彼我の蔵書を対照しやすくしてある。また明年度刊行を目標に漢籍目録刊行委員会が設置され，刊行費の概算要求や市販の方法等の検討を進めている。「センター通信」No. 4 の池田末利先生の提言にできるだけ応えたいものである。

第２次事業計画として進めていた「センター叢刊」は，44年度に「郁達夫資料」（５輯）「新収図書目録」42・43年度（６輯）「朝鮮研究文献目録」単行書篇（７～９輯）「李大釗文献目録」（10輯）を刊行し，45年度に「明刊元雑劇西廂記目録」（11輯）「朝鮮研究文献目録」単行書篇索引（12輯）同論文篇（13・14輯）「魯迅全集注釈索引」（15輯）の刊行を準備中である。さらに第３次計画としては，東大内の漢籍 union catalogue の企画立案を進め，さらに将来のあり方について検討している。

センターについての雑感

上　原　淳　道

「センター通信」４号，６頁の右下すみに「お願い」が載っていた。

○センターが存在していることを知らない研究者がまだまだ多いようです。（中略）皆さまのお近くに「センター通信」の届いていない研究者がございましたら，御一報くださることをお願いいたします。早速お送りいたします。

この「お願い」の文章を引用したのは，なにも，文中の「ございましたら」は表現として不適当であり，「おられましたら」と改めるべきである，などと言うためではない。私はこの「お願い」を読み，早速センターあてにはがきを書いて，神奈川県に住む私の知人――センターの存在を多分知らないであろうところの――に対して「通信」を１号から４号まで送って下さるようにと依頼した。

10日ばかりたって，その知人から私あてに手紙が来た。その手紙には――（私信を無断公開することはよろしくないかもしれないが，このさいはごかんべん頂きたい。）

……本日「東洋学文献センター」の通信がおくられてきました。ためつすがめつ各号（１～４）を読みまするうちに上原学兄のご配慮によるものと判断，ここに礼状をしたためる次第であります。ありがとう存じました。（目的）の第１条によりますと「……学外の研究者の利用に供する云々」とあり，これは異なこと，珍なこと，いやご奇篤なことと感じ入りました。なにがどのような過程でこういうことになったか――，４誌を通読していくらか分りました。お役目ごくろうさまです。皆様のお志と御奮闘に，はるかに敬意を表します。……

この知人は，もと某新聞社の記者をしていた人で，著書もあり論文もある人だが，大学の卒業生ではなく，いかなる大学あるいは研究機関にも所属していない。かつて東大某学部の図書を利用したく思ったが，利用させてもらえず，その件に関して当時の東大総長に手紙を出したが，返事はなかった，と聞いている。この知人が，「東大問題」（ある人々は「東大闘争」と呼び，またある人々は「東大紛争」と呼ぶ）に関して，私にくれた手紙のなかに次のようなことばがあった。

……二十数年税をおさめてきた私ですが，今までこれというお返しを国家機関から正当に受けたという経験がありませんので，よろしくよろしくおたのみします。むろんあなた個人にではなく，東大全教師，全学生に対して申上げているわけです。

かつてそのような経験をもち，かつてそのような意見を寄せた人であるからこそ，「東洋学文献センター規則」の第１条に「……学外の研究者の利用に供する……」とあることに対して，上に引用・紹介したような対応・反応を示したのであろう。

＊　＊　＊

さて，私は「東洋学文献センター運営委員会委員」の１人であるから，センターのことはよく知らない，などとは「職務上」からは言えない。しかし，つとめさきが本郷ではなくて駒場にあり，かつ，駒場においてかなり多くのしごとをある意味では進んで引受けている私には，しばしば本郷の研究所（ないしセンター）を訪れることがむつかしくなり，したがって，センターの日々の情況にうといのもやむをえないであろう。もっとも，それとは別に，センターのこと，なかんずく，その発足の経緯については，この「通信」２号の記事を待つまでもなく知っていることもある。具体的に

は，センターの設立に対して反対意見あるいは反対運動があったということなのだが，かつて反対意見・反対運動があったことのいわば痕跡が，たとえば「通信」2号の古島和雄氏の文章にも現われており，また，ちがった角度からだが，たとえば「通信」3号の宇都木章氏の文章にも現われている，と言えよう。

私は，センターの設立に関しては，それに対する反対意見にかなり共鳴しながら，結局は「運営委員会委員」になってしまった。それはちょうど「東大問題」に関しては，全共闘の意見にかなり共鳴しながら結局は「造反」せず授業再開をしてしまったのと似ている。しかし，それだからと言って，私は最初に提起されていた問題を忘れたくはない。私がしたこと，私が行なった選択は，いずれ判断され，裁かれるときが来るであろうが，そのとき私を判断し，裁く主体は，大学に行きたくても行けなかった人々——人民大衆でなくてはならない。旧態依然たる「東洋学」を続ける人，外国のアジア研究を追いかける人々にとって，センターが便利に機能するかどうかというようなことは私の関心の外にある。

（東京大学教養学部教授・東洋学文献センター運営委員会委員）

お　知　ら　せ

当センターで発行しております。センター通信とセンター叢刊の配布につきましては，これまで何度かお知らせいたしましたが，その後も各方面よりお問い合わせがありますので，改めてご案内いたします。

(1)　**センター通信**は，研究者の皆様にセンターの諸活動をお知らせし，また皆様からの御意見をお寄せいただくことによって，センターの事業をより活発に，有意義にしていくことを目的として発行しております。現在原則として，関係各機関宛に一部，また関係各機関所属の研究者（原則として講師以上の専任教員の方）宛に各一部送付しております。

また本来の目的を十分に達成するため，上記以外の機関および個人の御希望のむきにもお送りいたしますので，御遠慮なくお申し出下さい。なお配布の行き違い等のお問い合わせは，念のため照会することがございますが，御了承願いあげます。

(2)　**センター叢刊**は，“関係研究者一般„の共同利用を目的として発行しておりますので，関係研究機関宛に各一部送付し，原則として個人宛にはお送りしておりません。

ただし，一定部数（45年現在，約100部）の余裕を見て発行しておりますので，その叢刊の内容に直接関係ある分野での研究者の方から，送付希望のお申し出を受けた場合には，当該叢刊の残部の許す限り，御希望にそうようにいたしております。その場合は従来（あるいは将来）の御研究について，説明いただいた文章をお添え願えれば幸いです。

また本叢刊を御利用になって，研究成果を発表，公刊された場合には，ぜひとも当センターへ御連絡下さいますよう，お願い申しあげます。

なお，出版その他営利事業に専従しておられる方からの個人宛送付のお申し込みは，原則としてお断わりいたしております。

「郁達夫資料」を読んで

飯　田　吉　郎

こんど，伊藤虎丸，稲葉昭二，鈴木正夫の3人によって「郁達夫資料」が出版された。筆者も10年まえ，「現代中国文学研究文献目録」を作ってみた経験からみて，この「資料」はとくに日本でなければ発掘できない貴重な資料をふくむ，正に手と足で蒐集，編集された，たいへんな労作であるといってよい。とくに留日時代の作品を収めた，雑誌＜雅聲＞の追跡調査——これについては，近藤春雄の紹介が最初であろうか——や郁達夫の殺害状況を当時の関係者から聞き書きした部分などは，本書の中でも，もっとも生彩と重みを加えているところである。

ところで，資料の蒐集というのは，まことにきりのない，しかも無償の奉仕を前提とするものである。「資料」のばあいでも，定稿のためには，こんご更に継続的な無償の努力を必要としよう。そのためにも，読者のひとりとして，いくつかの感想を書きちらして，こんごの「資料」の完成のために，いくらかのお役に立てば幸いである。またこの拙稿の一足先に，殺害の真相を解明——「郁達夫資料」の出版（夕刊朝日，昭45. 2. 14）の黒氏の書評があるので，これと重ならない面で，つまり資料の補充という面でのべてみたい。

「資料」の中で，Ⅰ，Ⅱの中国における部分は，編者たちが，もっとも苦労したところであるにもかかわらず，結果としてはもっとも完成度の弱い部分であろう。しかし，こんごの努力の手がかりが全くないわけではない。たとえば，8年まえ，上海，文芸出版社より，＜創造社期刊目録＞ほか若干の資料が発表されているからである。

ところで，「沈淪」（P. 1）の出版が創造社叢書第2種（第3種のはず）であるかどうかなどと，細かなことをいうと厄介になるので，ここでは大きな面についていおう。「文芸論集」（P. 1）は，1926. 4出版，1930. 10再版（増訂）。「她是一個弱女子」（P. 5）の初版は，1928. 12 現代書局。「達夫日記集」（P. 8）は，1935. 7出版など。

Ⅱの部分では，＜創造季刊＞(P.26)に“編集余談（1. 1）„を，また＜洪水＞（P.28）に“＜鴨緑江上＞読后感（3. 29）„を，＜新消息＞（P.30）に〝告浙江的教育当局〟(2)などを増加できよう。またⅢのうち，中国については，黄人影編「文壇印象記」（1932）が“郁達夫印象記„（匡亞明）を収めているのをあげよう。

Ⅲの3．本邦出版の参考文献の中では，山口慎一が＜支那新文学書解題＞(書香)で，＜達夫全集＞について解説をつづけ（29. 8～12），山田儀四郎が＜現代作家とその代表的作品＞(「上海」)で，〝銀灰色的死〟〝過去〟を紹介している（1933. 5. 5～9. 5）。あるいは，＜大魯迅全集＞（改造社）の内容見本に，郁達夫が〝魯迅の偉大〟という一文で，〝我々が一部分を見て居る時，彼（魯迅）は全般を見た。我々が現実を捕らへんと焦っている瞬間，彼は古今未来を把握した……〟とのべているのをあげよう。また橋川時雄編「中国文化界人物総覧」（1940. 10）の＜郁達夫＞の項を落しているのは残念である。本書には「幾個偉大的作家」（中華書局），「文芸研究」（良友公司）など未見の著作を多数あげており，類書の中では，もっとも利用度の高い解説である。

附，邦訳作品の中で，一，二つけ加えておこう。達夫の小説のもっとも古い紹介は，野野村正雄訳“血と涙„（P.57）となっている。が，小生の知るところでは，大内隆雄訳“過去„（1928. 1），頼冨貴訳“過去„（1928. 12）が，確認できるもっとも早い時期の紹介であろうか。前者は山口慎

一の筆名で，雑誌<協和>に発表，また後者の頼冨貴は台湾出身の記者であり，雑誌<日支>に発表されている。

Ⅳ年譜の中では，東京詩人クラブが新宿，大山に郁達夫歓迎会(1936. 12. 14)を開き，日本ペン倶楽部が武者小路実篤，郭沫若，郁達夫３氏の歓迎会（12. 16）を開いているのをつけ加えてよかろう。因みに後者の記念写真が<文芸年鑑>のグラビアに収められている。ついでに年譜の中で，「支那の現状について」（P.87）などは，正しくは「……就いて」のはず。

さいごに，郁達夫をモデルとして登場させた小説に“アジアの子„（P.91）がある。この短篇は，「風雲」（宝文館，1941）に収められていること，拙編<補遺>(「大安」1961. 5）に，また<朝日>の書評氏（黒）の指摘のごとくである。しかし何れも親切さをかく。この小説は，もと<日本評論>（1938. 3）に発表され，のち「風雲」と改題，出版されたもの。この点，郭沫若が“再談郁達夫„で，<中央公論>としているのは，何かの記憶ちがいであろう。

ご３人の労作「郁達夫資料」についていくつかの感想というよりは，追加すべき資料についての私見を書きちらしたにすぎない。もっと書くべき，あるいは書きたいことがらが無いわけではないが，与えられた紙面もつきてしまったので，さいごに小さな無いものねだりひとつ。こんごは，ぜひ「資料」作成のための参考文献を明示してもらうことが，利用者にとってだいじではないだろうか。

（大東文化大学講師）

センター利用者としてのお願い

川　上　久　寿

センターについてひとことで感想を申し上げますと，たいへん便利でありがたいものができた，ということです。「センター通信」第４号にみえる「センター利用のしおり」は私を喜ばせるに充分でした。それはあらゆる研究者の利用できる機関だということで，閲覧も複写もできるし，そのうえ調査もしていただける。この「しおり」には東洋学にかんする文献で参考調査していただける範囲がしるされている。それによると，漢籍の所在，研究所の漢籍について，最近の研究論文について，この３つになりますが，そのうち，２番目の「研究所の漢籍について」にかんして少しばかり質問やお願いがございます。「例えば，研究所にある『女仙外史』はどんな書物かという質問には，清の呂熊の著，釣璜軒原刊本，全百回，永楽年間の唐賽児のむほんをふえんした小説と答えることができます。」「通信」に書いてある以上のような調子でゆくと，私にはとってもありがたくて便利至極なことになると思いました。私は地方に在住しており，そのうえ個人の蔵書はまず無いにひとしく，大学の図書館のほうも漢籍は寥として少ない。そういうわけで，人さまならばセンターを煩わすことなくすむことですら，私はセンターにお願いしなければならぬことが多々あるだろう，と思われるからです。

中国学にかんするロシヤの書物を読んでおりますと，どうしてもセンターのお世話にならねばならなくなるのです。たとえば，こういうものを例としてあげられるでしょう。バズネーエワの「魯迅伝」のなかに Ши Лунь という中国詩人の名が出てきます。ところでこのシルンはおそらくShi Lunでしょうから，そしてこのひとは抗日戦争中の愛国詩人なのですから，その旨もしるして倉石先生のご教示を請うたことがあります。しかしついに判明しませんでした。バズネーエワさんが綴りを書きまちがえたミスプリントかどうかはまだ確かめていません。こういうばあい，センターに問いあわせても判明しないかもしれない。或いはたちどころにではないにしても解決できるかもしれない。これまで私にとって絶望的と思われていた事どもでも，センターの設立によって或いはという希望の光りがさしてきたことになりました。センターはそういう点で意味があり，大きな姿となって私の前にたちあらわれてきたのです。これほど便利でありがたい機関があるでしょうか。さしあたってこのShi Lunなどは明らかにしていただきたいと思いますが，これはお願いです。

その他にもまだあります。Xia Zhi-qingという中国人でアメリカにいたことがあるとかいうとかいう魯迅研究家の名前も漢字にうつせません。これはソ連の中国学者でベルジングというひとが書いた「翻訳家としての魯迅の活動」なる論文にチェコの中国学者プルシェーク（このひとの論文は中国でもよく引用されていたことがあります）とならんでシャジチンが出てきます。

このように，漢字で書かれていない中国人の名前を漢字で知りたいときお調べいただけたらたいへんありがたいことです。そういうことをして頂けるのでしょうか。

私は「海上花」という本をもっていませんし，また読んだこともないのですが，あるロシヤの本を読んでいますと，この本の名前が出てきました。むろん作中の主人公らしきものの名もあらわれます。Zhao Pu-zhang，Zhao Er-bao など。こうした名前は「海上花」をちょっと覗きさえすれば忽ちわかることですが，本をもたない私としてはこれまたセンターのご厄介になりたいところです。もっとも，これなぞは北大へゆけばよいことでしょうが。

それから，今度は人名でなく船会社の名前で Wutong というのが1920年代の中国にあったはずなのですが，これも又わかりません，若い時のファジェーエフがこの会社の汽船で松花江を航行してハルピンへいったことがあるといいます。

ロシヤ語にうつされた中国の人名地名などで，とうてい漢字に復元は絶望とみて，諦めてしまったのもあります。北伐に従軍したソ連の将兵数名の手記を集めた「北伐革命の思い出」という本があります。数年前私はこれを全訳したさい，わからぬ人名地名を東洋文庫でしらべ相当程度はしらべがいがあったのですが，多くはダメでした。中国語をしらないロシヤ将兵が耳にした人名地名は誤ってロシヤ語に写されているものが多いらしく，中国の下級将校の名前や広東省の片田舎，村落の名なども出てきてどうにもならなくなってしまい，漢字への復元は放棄してしまいました。これはおそらくセンターでさえお手上げになるのではなかろうかと思います。

以上のようなわけで，「北伐革命の思い出」は無理としても，それ以外ここにあげた中国人の名前や会社名は何とかなるだろう，そう思われましたので，「センター利用のしおり」を読んでたいへん嬉しくなってしまい，とても便利でありがたいことだ，と重ね重ねおん礼申し上げ，またお願い申し上げるような次第です。

（小樽商科大学教授）

<お答え>

1　Shi Lun：捜しあぐねましたが，似たものでは錫金（″春天已来到了中国„の作者）の名が藍海「中国抗戦文芸史」（141P）に見えます。

2　Xia Zhi-qing：C. T. Hsia　夏志清，The Classic ChineseNovel, Columbia Univ. Press 1968の著者。

3　Zhao Pu-zhang：Zhao Pu-zhaiか？趙樸斎　　Zhao Er-bao：趙二宝

4　一般にロシア文字表記による中国の人名・地名の復原などは，できる丈の努力はいたしますが，当センターの現状では，十分には御希望にそいかねるかと思われます。なお，原書の題名・著者・刊行年次などを，同時にお知らせいただければ好都合です。

東洋学文献センター運営委員会委員

（昭和44年度）

東研	教授	川野重任	
〃	教授	橋本秀一	
〃	教授	窪徳忠	
〃	教授	泉靖一	
〃	教授	荒松雄	
〃	教授	鈴木敬	
〃	教授	佐伯有一	
〃	教授	大野盛雄	
〃	助教授	山崎利男	
〃	助教授	尾上兼英	
総図書	館長	松田智雄	（新）
法	教授	丸山真男	
文	教授	前野直彬	
農	教授	古島敏雄	（新）
経	教授	川田侃	
教養	教授	上原淳道	
社研	教授	古島和雄	

東洋学文献センター職員

（昭和44年度）

センター長	教授（併任）	小口偉一
センター主任	教授（併任）	窪徳忠
	教授（併任）	佐伯有一
	助教授（併任）	尾上兼英
	講師	初見昇
	助手	陳明新
	助手	沢谷昭次
	事務官	神田百合枝
	事務官	畦浦美矢子
	事務官	渋谷義治
	事務官	渡辺茂彦

（昭和45年度の異動）

☆東洋学文献センター運営委員会委員の交代

東研	旧	教授	橋本秀一	・教授　泉　靖一
	新	助教授	鎌田茂雄	・講師　松丸道雄
学内 法	旧	教授	丸山真男	
	新	教授	滋賀秀三	
経	旧	教授	川田　侃	
	新	助教授	関口尚志	

☆東洋学文献センター職員

退官　センター長　教授　小口　偉一　辞任　教授　佐伯　有一・助教授　尾上　兼英

新任　センター長　教授　泉　靖一

編集後記

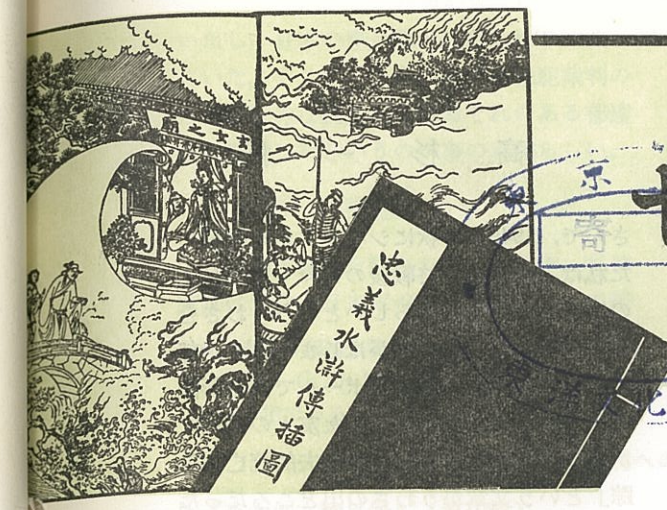
45年度は東研側のメンバーに大異動が生じましたが，目録刊行の準備は進行中です。

本号はセンターに関係あるいは関心をおもちの方々から，多様な御意見をお寄せいただき感謝しておりますが，新進の研究者の御批判もいただきたいものと願っております。（KO）

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報“センター通信” No.5 1970年6月20日
発行責任者　新井康次　　東京都文京区本郷7丁目3ノ1　電 代表（812）2111（内線）7831

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
The University of Tokyo



センター通信

No. 6　1971. 2

東京大学 寄 研究所

センター長就任にあたって

鈴　木　　敬

研究所長に就任した際，センター通信に一文を寄せることになっているので何か書けという。さて何を綴ろうかと思案投首して，はじめて文献センターについて知らなすぎたことを悟って冷や汗をかく思いがした。

就任早々，漢籍分類目録出版の予算がつきそうだとしらされて，あらためて随分ながくかかったものだという感慨とともに，これだけ多量のカードを作り，分類する作業がよくもこんな短時日でできたものだという印象をも鮮烈にした。

急逝された泉前所長をはじめセンター関係者の努力には当然のこととして謝意を表さなくてはならないが，一見，無関心のようにみえたかも知れない所員の協力を忘れるわけにはいかないだろう。昭和46年度中に目録が，47年度中には索引も完成されるという。それはそれなりに戦争のような忙しさだろうと想像されるが，これではじめて東洋文化研究所所蔵の漢籍が十分に陽光を浴びるわけであり，所内外の利用者の便も大幅に改善され，膨大な漢籍を擁しながら目録の未公刊の故に，少しばかりこそばゆいような気もした私も吻っとしたような，そして楽しい思いを禁じえない。

漢籍分類目録作製そのものが立派な学問的業績であり，その作成の意義は十分誇ってよいわけだが，これが刊行されると東京大学内外の利用者の急激な増大が予想され，またあらたな問題も起る可能性がないではない。定員削減という金しばりを強いられ，増員も多くは望めない昨今，今の研究所の体制で来るべき利用者の増大，複写その他の業務の増加にどう対応して行くのか。目録を前にして胸ふくらむ思いではありながら，全く喜びだけにひたれない気もする。目録を仏だとすれば，魂を入れてもらわなければ困るのである。かなりの額の国費が漢籍目録作製の意味の大きさの故に認められたのだから，あとは漢籍利用の点を考えて欲しいわけである。そうでないと分類目録は，その体裁の立派さと，一見いかめしい書名の故に，応接間の飾物になりかねない。仏様にこだわるのは私が古美術研究にたづさわっているためかも知れないが，仏を作ったら魂入れをしなければならず，開眼供養もしなければならない。私は漢籍目録が死仏になることをもっとも恐れるのである。

（東京大学東洋学文献センター長）

Z
614,6